

令和 7 年 8 月 7 日

令和6年度 鹿児島女子短期大学 アセスメント報告書

教学マネジメント会議

目次

アセスメント・ポリシー（学生の学修成果の評価方針）	3
1. 短期大学全体	4
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	
2. 児童教育学科	15
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	
3. 生活科学科生活福祉専攻	22
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	
4. 生活科学科食物栄養学専攻	26
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	
5. 教養学科	33
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	
6. あとがき	49

アセスメント・ポリシー（学生の学習成果の評価方針）

鹿児島女子短期大学では、学生の学習成果の評価方針として、その目的、達成すべき質的水準等、学習成果を査定する方法を次のとおり定めています。

	入学前・入学時（入学時考査）アドミッ ション・ポリシーを満たす 人材かどうかの判定	在学中（単位認定・進級判定） カリキュラム・ポリシーに則って 学修が進められているかどうかの 評価	卒業時・卒業後（卒業時判定） ディプロマ・ポリシーを満たす人材に なったかどうかの判定
短期大学 全体レベル （機関レベル）	○入学試験 ・小論文・教科の試験 ・調査書・面接、口頭試問 ・アピールシート ・実技試験 ・取得資格 ○新入学生アンケート	○カリキュラムマップ ○カリキュラムツリー ○修得単位数 ○学生アンケート ○地域活動参加状況 ・地域連携センター活動	○就職及び進学状況・率 ○卒業生アンケート・動向調査 ○卒業率 ○単位取得状況 ○免許・資格取得状況・率
学科レベル （教育課程 レベル）	○入学前教育 ・課題レポートの提出 ・実技指導	○定期試験 ○修得単位数 ○GPA ○教職履修カルテ （児童教育学科・生活科学科食 物栄養学専攻） ○自己分析シート（教養学科）	○就職及び進学状況・率 ○卒業生アンケート・動向調査 ○卒業率 ○単位取得状況 ○免許・資格取得状況・率 ○GPA ○修得単位数 ○学習に関する調査
科目レベル （個々の授業レ ベル）		○授業評価アンケート ○成績評価 ○実習所見・評価	○単位取得状況 ○成績評価 ○授業評価アンケート

【必要書類】

No.	IR 情報一覧	No.	IR 情報一覧
1	進学に関するアンケート結果(入学前検証も含む)	13	GPA 年度比
2	AP に則った入試の検証	14	GPA 一覧（学科・専攻・コース・学年別）
3	学科専攻コース別入試成績一覧	15	学習の達成度自己評価
4	卒業者数（R6）	16	ティーチング・ポートフォリオ（R6）～授業改善報告書
5	在籍者数（R7）	17	学生による授業評価アンケート結果（2023FD 報告書）
6	免許・資格の取得状況（R6）	18	学生満足度調査（R4,5,6）
7	修得単位数	19	鹿児島女子短期大学卒業生アンケート（R4,5,6）
8	入学年別の退学者・除籍者数・中退率／卒業者数・卒業率／留年者数（全体）（学科・専攻別）	20	短期大学生調査（R5,6）
9	留学生・海外派遣学生・受入学生	21	短期大学生調査の本学結果（R5,6）
10	科目等履修生数一覧	22	クラス別就職率（R4,5,6）
11	年度毎中途退学者数推移	23	卒業生アンケート
12	年度毎中途退学理由	24	「短期大学生調査-2024 年調査全体集計結果報告」～学習時間について

Ⅰ. 短期大学全体

(Ⅰ) アドミッション・ポリシーに基づく検証

①入学試験

本学のアドミッション・ポリシーは、①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性、以上３つを備えた入学者の受け入れを方針として掲げている。学科・専攻のアドミッション・ポリシーは、それを踏まえてより具体的に表現したものである。入学試験において、受験者は総合的に評価され、入学者が判定される。入学試験は多様な選考方法で行われるが、その中でも受験者の多い学校推薦型選抜と総合型選抜について、令和７年度は小論文の評価基準を具体化し、アドミッション・ポリシーの方針の関連性を細分化（*印の項目）した。

表Ⅰ－Ⅰ 評価基準とポリシーとの関連性

		評価基準	①高校教育の 基礎的知識・ 技能	②思考力・判 断力・表現力 と課題解決に 取り組む姿勢	③意欲と 協調性
学校推薦型選抜	小論文	【思考力】課題・テーマの正確な理解と分析ができて いるか*		○	
		【判断力】読み手が納得できる矛盾、飛躍のない主張 と論理展開ができていくか*		○	
		【表現力】内容をイメージしやすい説明と段落構成が なされているか*		○	○
		分量が上限の８割以上ある	○		
		誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れが３種類未満 である	○		
		段落の要素があるか	○		
	面接	入学の目的意識			○
		就学意欲			○
		態度		○	
総合型選抜・一般	アピールシート	志望理由及び自己アピールが十分に示されているか			○
		気になるニュースの要約ができており、それに対する 意見は明確であるか	○	○	
		入学したい意欲が感じられるか			○
		分量が上限の８割以上ある*	○		
		誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れが３種類未満 である*	○		
	面接	入学の目的意識			○
		口頭試問への準備		○	
		態度		○	

*総合型選抜・一般は、「総合型選抜一期、二期、三期、スポーツ・全学科」を指す

その他、一般選抜では学力検査や大学入学共通テスト成績によって①が測られ、調査書によって②③が測られる。社会人入試、外国人入試、帰国子女入試では、小論文、面接によって①～③が総合的に計測される。

令和6年度入試に関しては、各学科・専攻の詳細な入試の分析からわかるように、選考方法それぞれについて適切な方法により、総合的に①～③を満たす入学者が選抜されている。なお、各入試判定にあたっては、受験者を100点満点で客観的に評価し、学科の意見を聞いたうえで、アドミッション・ポリシーに基づいて、教授会で全学的に合格者を判定している。

また、アドミッション・ポリシーに対する受験者の理解度については、令和7年4月に実施した新入生対象の「進学に関するアンケート」において、「本学のアドミッション・ポリシーをよく読み理解して受験しましたか」という設問に対する回答で、回答者の94.3%が「はい」を選択し、各学科・専攻のアドミッション・ポリシーについての同様の質問に対しても、「はい」と回答した者は全体の93パーセントであった。最も低い学科・専攻でも85%であり、アドミッション・ポリシーは受験者に十分浸透していると言える。

②入学前課題

合格者には各学科・専攻からアドミッション・ポリシーに基づいた入学前課題を出している。それは入学予定者に対して、大学が求める能力や適性を事前に把握し、入学後の教育へのスムーズな移行を促し、さらに資質・能力を高めてもらうためのものである。

新入生向けの「進学に関するアンケート」には、入学前課題は入学後の学びの助けなりそうかの質問に対し、「大いになっている」「ややなっている」の割合が全体で75%であった。また、量についても「ちょうどよい」の割合が74%と回答しており、毎年度に課題内容、量や難易度の検証し、改善を重ねており、前年度より適切な内容となっている。また、各学科・専攻によっては評価基準に対する課題はみられるが、アドミッション・ポリシーに明示された要件と整合しながら入学前課題を評価した結果より、全体的にアドミッション・ポリシーに基づく入学者受け入れが行われていると判断できる。

③総合評価

全体をとおして、入学試験の内容や選考基準は、①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性を測定できており、各学科・専攻からも試験結果の分析から選抜された学生がアドミッション・ポリシーに掲げる資質を有している割合が高かった。

また、進学に関するアンケートの結果からも志望時においてアドミッション・ポリシーに掲げている内容を自己認識している学生が多数を占めており、入学前教育についても当該ポリシーに掲げる内容の育成や補完が図られていた。これらの検証結果より、本学のアドミッション・ポリシーを満たした学生が入学していると判断できる。

(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証

①試験とその結果としての成績評価・GPA

本学学生のGPAについて、令和4年度～5年度入学生全体の、GPA値の変化について表に示す。

この表は、GPA2.0以上の学生数と割合を示すものである。

表2-1 GPA値の変化

	1年前期		1年後期		2年前期		2年後期	
	2.0以上 人数(割合)	全体 人数	2.0以上 人数(割合)	全体 人数	2.0以上 人数(割合)	全体 人数	2.0以上 人数(割合)	全体 人数
令和4年度入学生	285 (81.4%)	350	287 (84.4%)	340	303 (88.4%)	343	316 (93.2%)	339
令和5年度入学生	252 (83.4%)	302	264 (89.5%)	295	267 (89.3%)	299	270 (91.9%)	294

いずれの年度生も学期を追って GPA 値 2.0 以上の学生数が上昇している。各学科・専攻のカリキュラム・ポリシーに則って、適切に学習が進められているものと考えられる。なお、令和 6 年度後期より「GPA に基づく成績不振者の指導」について、指導対象者を教授会にて示し、指導教員による指導と助言（補習・個別面談等）を実施し、指導内容を記録として残している。また、成績の平準化も実施しており、GPA の基礎となる個別科目の成績評価のあり方についても全学的に周知されている。カリキュラム・ポリシーは、適切な評価に基づく GPA 算出と、それに連動した適切な助言や指導を通して、実質化が着実に進められている。

②修得単位数

本学の卒業要件は 62 単位である。令和 5 年度と令和 6 年度卒業生について、卒業時の平均修得単位数および最高・最低値を学科・専攻・コース別に挙げる。

各学科・専攻・コースで、卒業までの修得単位数が異なるが、これは卒業要件の 62 単位に、免許・資格等のために必要な単位が上乘せされるからである。表に示すように、令和 6 年度卒業生（令和 5 年入学生）の場合、それぞれの卒業時の平均取得単位数は、児童教育学科小・幼・保コース 148.2、幼・保コース 106.1、生活科学科生活福祉専攻 108.8、食物栄養学専攻 74.1、教養学科 77.1 である。なお、前年度より修得単位数が減っている要因としては、資格取得の有無および選択科目の増加等があげられるが、各学科・専攻では、各科目や科目群に求められる修得単位数の最低修得単位数を超える単位を修得している。このことは、カリキュラムが充実しており、学生が多くの科目や内容を履修していることを示しており、幅広い知識や技能の習得が促進されていると考えられる。なお、今後の課題としては、児童教育学科の開講学期ごとの配当の検討が必要もあるが、全体をとおしてカリキュラム・ポリシーに則った運用がなされていると判断できる。

表 2－2 各学科・専攻の平均修得単位数

	卒業年度	平均総修得単位数	(最高:最低)
児童教育学科 小・幼・保コース	R5 (R4 入学)	152.0	(165:94)
	R6 (R5 入学)	148.2	(162:68)
児童教育学科 幼・保コース	R5 (R4 入学)	106.0	(116:80)
	R6 (R5 入学)	106.1	(116:87)
生活科学科 生活福祉専攻	R5 (R4 入学)	115.6	(124:111)
	R6 (R5 入学)	108.8	(112:102)
生活科学科 食物栄養学専攻	R5 (R4 入学)	77.9	(107:63)
	R6 (R5 入学)	74.1	(106:67)
教養学科	R5 (R4 入学)	80.6	(113:62)
	R6 (R5 入学)	77.1	(130:63)

③学生アンケート

「学生満足度調査」の中で学生に聞いている項目「教育方針・教育内容について」の結果を下表に示す。令和 6 年度も 5 年度と同様に、9 割以上の学生が「満足」または「やや満足」と回答している。そのため、カリキュラム・ポリシーに則って作られた教育課程は、概ね妥当なものであると考えられる。

表 2-3 教育方針・教育内容について

		令和 5 年度		令和 6 年度		対前年度比率
		回答数	回答率	回答数	回答率	
全体		557	86.8%	458	82.1%	▲4.7%
回答	満足	256	46.0%	218	47.6%	▲5.2%
	やや満足	279	50.1%	230	50.2%	+9.3%
	やや不満	18	3.2%	8	1.7%	▲3.9%
	不満	4	0.7%	2	0.4%	▲0.3%

令和 5 年度から、全教員がティーチング・ポートフォリオも作成し、その中に学生による授業評価アンケートの結果も踏まえた改善策の妥当性等も記載し、授業改善の可視化を図っている。また、非常勤教員においては、別途授業改善報告書を提出している。また、「カリキュラム・ポリシーに則って学習が進められたか」という項目を設け、教員は科目担当者として自己点検し、科目レベルの授業改善にも役立てている。

④教育内容

本学の学習成果を達成するために、ディプロマ・ポリシーに基づいて「一般教養科目」と「専門科目」を組み合わせ、各学科・専攻の教育課程を組織的、体系的に編成している。科目から成り、「地域等との連携に基づき体験的な学習を行う科目」に注力することになっている。短期大学生調査によると一般教養科目、専門科目において、入学してから知識・能力が「大きく増えた」「少し増えた」と回答した学生がそれぞれ 85%を超えており、一般教養科目における学生の基礎的な資質・能力の育成と視野拡大を、「専門科目」は専門的知識・技能の習得に結び付いている結果となった。

表 2-4 入学してから次のような知識・能力はどの程度変化（向上）したか

	一般教養			専門分野や学科の知識		
	1 年生	2 年生	合計	1 年生	2 年生	合計
大きく増えた	35	65	100	116	173	290
	15.0%	24.6%	20.0%	49.6%	65.5%	58.1%
少し増えた	161	167	329	111	82	193
	68.8%	63.3%	65.9%	47.4%	31.1%	38.7%
変わっていない	31	28	59	6	9	15
	13.2%	10.6%	11.8%	2.6%	3.4%	3.0%
少し減った	6	4	10	0	0	0
	2.6%	1.5%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%
大きく減った	1	0	1	1	0	1
	0.4%	0.0%	0.2%	0.4%	0.0%	0.2%
合計	234	264	499	234	264	499
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2024 年大学・短期大学基準協会の「短期大学生調査」)

なお、一般教養科目は、令和 5 年度に新設されたデジタル教育プログラムの科目群（「AI 社会論」「データサイエンス概論」「データサイエンス演習」「AI プログラミング」）の位置づけや、3 学科の多様な教育資源をいかした文理融合科目等を検討中である。

⑤総合評価

①～④の内容より、成績評価においては、修得単位数も計画通りに履修され、必要な学習成果を確実に獲得していることが示された。実習所見や評価においては、学科によってはコミュニケーション力・記述式等において、カリキュラムの検討等今後の課題もみられるが、相対的に学生の実践的な能力や資質の向上がみられた。授業評価アンケートでは、学生の満足度や理解度の結果より、カリキュラムの内容や指導方法が適切であった。そして、到達目標等に十分寄与しており、カリキュラム・ポリシーが適切かつ効果的に運用されていると評価される。なお、学科の検証にあがっていた課題をふまえ、今後は関連する分野、科目の教員同士で、連携、協働して人材育成を図りながら教育内容の充実と質の向上に努めていく。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

①就職および進学状況

令和5年度以降の卒業生の就職率と進学者数（次年度の5月1日現在）を下表に示す。各年度の各学科とも96%を超える高い就職率を維持していて、全体では98%以上の就職率となっている。進学者のほとんどは、専門性をさらに高めるための編入学である。

表3-1 就職状況

	令和5年度		令和6年度	
	就職状況(%)	進学者数	就職状況(%)	進学者数
児童教育学科	99.4	1	99.3	8
生活科学科	97.7	2	96.2	0
教養学科	97.4	4	98.5	2
全体	98.7	7	98.4	10

②卒業生アンケート

毎年、卒業生の就職定着率・離職率及びその原因等に関する調査・分析のために実施している「卒業生アンケート」からは、回収率は前年度より増加はしているが決して高くはないが、一定の傾向が見て取れる。アンケートは卒業後2年を前にした2月に実施しているので、卒業後2年以内の離職の実態把握の参考になる。

表3-2 新卒時就職先の離職について

		令和5年度		令和6年度		対前年度比率
		回答数	回収率	回答数	回収率	
全体		61件	21.1%	80件	25.2%	+4.1%
回答	離職済み	10件	16.4%	11件	13.8%	▲2.6%
	継続就業中	51件	83.6%	61件	86.3%	+2.7%

卒業生は、短大で修得した学習成果、取得した免許・資格を生かして就職する者が大半であるが、その後、何らかの理由で2年以内の離職をしている者の割合も約1割強になるが、短大のディプロマ・ポリシーで示された資質・能力をもつ卒業生が、就職先の求める人材とマッチしているということは、一般的に言えるであろう。ただし、離職実態の経年変化にも留意し、就職先等の意見も聴取しながら、ディプロマ・ポリシーの実質化を図っていくことが必要である。

③卒業率

下表からわかるように、令和6年度入学生の卒業率は91.7%となり、前年より上回る結果となった。また、除籍者は0名、中退者数は17名といずれも前年度より下回る結果となった。（中退率）も、令和6年入学生では名（5.6%）と例年を大幅に下回っている。指導教員の学力不振の学生に対する面接指導や修学支援の効果も影響があったと思われる。今後、ますます学力不振の学生については、全学的な視野からの支援は引き続き検討する必要があるが、全体的に学生がディプロマ・ポリシーに掲げる資質・能力を身につけ、卒業資格を得ていると考えられる。

表3-3 入学年別の退学者・除籍者数・中退率/卒業者数・卒業率/留年者数

卒業年度	入学者数	退学者数	退学理由				除籍数	中退者数	卒業者数	留年者数
			進路変更	経済的理由	体調不良	修学意欲低下等				
令和5年度	357	25	11	0	2	12	4	29 (8.1%)	321 (89.9%)	7
令和6年度	303	17	6	2	2	7	0	17 (5.6%)	278 (91.7%)	8

④令和5・6年度卒業生のGPA値の分布

本学のGPAに関するデータから、学生の学習状況と支援の効果について以下のように評価できる。まず、GPAが3.0以上は42.9%、3.0未満かつ2.0以上は49%を占めており、一定の学習成果を上げていることが示される一方、GPAが2.0未満で学習の進捗に課題を抱える学生も一定数存在している。ただし、今年度より令和6年度より修学支援体制を整え、個別の支援を継続的に実施しているおり、これにより、学期ごとのGPAが改善傾向もみられる。それぞれの学科・専攻の状況からみても学生一人ひとりの学習状況に応じたきめ細やかな支援を行っており、ディプロマ・ポリシーに沿った取り組みが着実に進んでおり、実質化に寄与していると考えられる。

表3-4 GPA値（上段：令和5年度卒業生、下段：令和6年度卒業生）

卒業年度	対象学生	3.0以上	3.0未満2.0以上	2.0未満
令和5年度	339名	149名(44.0%)	167名(49.2%)	23名(6.8%)
令和6年度	294名	126名(42.9%)	144名(49.0%)	24名(8.1%)

⑤免許・資格取得状況

各学科・専攻の記述から明らかなように、令和6年3月の卒業生のほとんどが、目標とする免許・資格の取得を果たしている。小・幼・保コースでは小学校教諭二種免許状、幼稚園教諭二種免許状、保育士証、幼・保コースでは幼稚園教諭二種免許状、保育士証、生活福祉専攻では介護福祉士受験資格、食物栄養学専攻では栄養士免許証、いずれも取得率80%を超えている。教養学科においても、多様な免許・資格の中から学生が選択して積極的に取得していることが窺える。これらは各学科・専攻のディプロマ・ポリシーに示された資質・能力や全学的な学修成果が十分身についたことの証明である。

⑥一般教養科目における達成度自己評価

一般教養科目のディプロマ・ポリシーに即して、一般教養科目の範囲で学生の学びを検証する。それぞれの一般教養科目は関連する主なDP（一般教養科目に適用する）に紐づけられており、授業評価

アンケート時に、学生から受講した科目の達成度自己評価（５段階）を回答してもらっている。
令和６年度開講の一般教養科目について、①「ほとんど達成できなかった」②「あまり達成できなかった」
③「最低限達成できた」④「おおむね達成できた」⑤「十分達成できた」のうち、④⑤を選んで回答した
件数を、DP別に示すと次のようになる（「FD 報告書 2024」をもとに作成）。

表 3－5 2024 年度学習の達成度自己評価

一般教養科目 DP	科目数 (講義別)	総回答数	④⑤の 回答数	④⑤の割合
①主体的な学びと柔軟な思考	39	315	290	92.1% (R5) 89.0%
②自己を高め、他者と関わる力	42	605	552	91.2% (R5) 88.7%
③地域活性化の担い手としての 課題解決能力	3	93	84	90.3% (R5) 86.7%
④社会に参画する力	49	367	317	86.4% (R5) 83.7%

どの科目群でも平均して達成度自己評価は 85%以上と高く、令和5年度の値を上回っている。今後は、客観的な評価や他の評価指標と併用して検証することが重要ではあるが、いずれのディプロマ・ポリシーについても、学生が学習内容に満足し、学びの意義を理解している可能性が高いと考えられる。

⑦総合評価

卒業率と就職・進学率は、学生の学習意欲や資質・能力の育成が適切に行われており、卒業生の GPA 値の分布の内容や免許資格取得率の結果からも、カリキュラムや指導体制が学生の学習成果や資格取得を十分に支援していることが明らかとなった。さらに、一般教養科目における学生の達成度自己評価も高く、学生自身が学習内容や習得状況より、資質・能力の向上を実感していることがうかがえた。①～⑥の結果より、ディプロマ・ポリシーに基づく教育の質保証が適切に実現されていることを示していると考えられる。

<資料>

【学習成果】

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、以下に掲げる資質・能力を学習成果とし、これらを学生が主体的に修得することにより、教育目標の実現を目指します。

- 1.現代生活に即した専門的知識と実践的技能及び思考力・判断力・表現力と課題解決能力を有する。
- 2.豊かな情操と高い教養を有し、心身ともに健康で調和のとれた人間像を目指して自己啓発ができる。
- 3.地域活性化・国際化の意欲的な担い手としての素地を有する。

【学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）】

本学では、上記の学習成果を達成するために編成された教育課程において、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与します。以下に、全学科共通のディプロマ・ポリシー及び各学科・専攻のディプロマ・ポリシーを示します。

《全学科共通のディプロマ・ポリシー》（一般教養科目に適用）

- (1) 主体的に学び、多様な考え方に触れ、柔軟な思考ができる。
- (2) 自己を高めるとともに、他者との関わりを良好に保つことができる。
- (3) 地域への関心を深め、地域活性化の担い手として課題解決に意欲的に取り組む。
- (4) 社会や文化に対して関心を持ち、広い視野に立って、社会に参画する力を持つ。

《児童教育学科のディプロマ・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（教育学）にふさわしいものとします。

- (1) 教育・保育に必要な専門性

教育・保育に必要な専門的な指導力を習得するとともに、それらを活用・実践する力を有する。

- (2) 課題解決能力

教育・保育の課題解決に必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力・人間関係調整能力等を有し、現場で実践できる。

- (3) 豊かな人間性

教育的な情熱や使命感・倫理観をもち、社会の変化に対応しながら、理想の教育・保育を目指して探究し向上しようとする態度を有している。

《生活科学科生活福祉専攻のディプロマ・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉士として深い人間理解ができ、実践的能力を身につけた介護リーダー及び心身の状況に応じた最も適切な介護等を行うことができる人材の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（生活福祉）にふさわしいものとします。

- (1) 専門的知識・技能

介護福祉及び医療・福祉事務に関する実践的かつ体系的な専門的知識と技能を修得している。

- (2) 主体的・創造的な課題解決能力

修得した専門的知識と技能を活かして、地域社会の実態を踏まえ、主体的・創造的に貢献する能力と意識をもっている。

- (3) 人間関係形成力とコミュニケーション能力

倫理観と責任感をもち、コミュニケーション能力と協働性を有し、多様な問題に臨む社会人としての態度を身につけている。

《生活科学科食物栄養学専攻のディプロマ・ポリシー》

食物栄養学専攻は、給食実務に強く、的確な栄養指導と食教育ができる栄養士及び健康の基盤である食物と栄養についての専門知識と技術を身につけ、地域社会の人々の健康づくりに貢献できる人材の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（食物栄養学）にふさわしいものとします。

- (1) 食物・栄養に必要な専門性

健康の基盤となる食物と栄養に関する専門的な知識と技能を修得し、時代と社会の要請に応える力を有する。

(2) 課題解決能力

教得した食に関する知識と技能を活かし、地域や現代社会の食に関わる身近な課題を見出し、それを解決に導くために求められる能力を有する。

(3) 豊かな人間性

食に関する幅広い知識・興味・関心に基づき、人が健全な食生活を送るために、他者と目的を共有し、協働できるように自らを高めることができる。

《教養学科のディプロマ・ポリシー》

教養学科は、実務教育と教養教育を柱とした実践的教育により、ビジネス実務能力と情報処理能力を身につけ、社会で活かせるコミュニケーション能力を備えた、グローバル社会に幅広く対応できる人材の育成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（教養）にふさわしいものとします。

(1) 専門的知識や技能

現代社会に求められる知識及び技能を活用する実践力と、情報を収集・分析・発信する情報活用能力を身につけている。

(2) コミュニケーション能力

他者に共感し、コミュニケーションスキルを活かして行動する社会性を身につけている。

(3) グローバル社会への理解

異文化とグローバル社会への深い理解のうえに、広い視野に立った国際性を身につけている。

【教育課程編成の方針（カリキュラム・ポリシー）】

本学の学習成果を達成するために、ディプロマ・ポリシーに基づいて、「一般教養科目」及び「専門科目」を組み合わせ、各学科・専攻の教育課程を組織的、体系的に編成します。

(1) 「教養教育」は、心と思想及び健康の探究を通して自己啓発をめざす科目群、社会及びキャリアの探究を通して社会参画の力を伸ばす科目群、異文化及び自然界の探究を通して広い視野から思考する力を伸ばす科目群の各分野で編成する。

(2) 「専門教育」は、各学科・専攻の特性を踏まえ、専門的知識と実践的技能を体系的に修得するとともに、課題解決能力を養うための科目をもって編成する。

(3) 地域活性化・国際化の担い手としての素地を形成するため、地域等との連携に基づき体験的な学習を行う科目を組み込んだ教育課程を編成する。

《児童教育学科のカリキュラム・ポリシー》

児童教育学科は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、学科の専門教育を以下のように編成します。

(1) 教職課程コアカリキュラム及び保育士養成課程を踏まえ、教師・保育者として必要な資質・能力を育成できるように体系的かつ系統的に科目を配置する。

(2) 学校現場・保育現場等のニーズに応えるため、知識・技能等を高める選択科目を設け、学生が主体的に専門性を高める環境を整える。

(3) 地域のニーズを踏まえ、地域に貢献する教師・保育者としての意識や知識・技能等を高めるための科目を配置する。

《生活科学科生活福祉専攻のカリキュラム・ポリシー》

生活福祉専攻は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、専攻の専門教育を以下のように編成します。

- (1) 専門科目には、介護福祉士養成課程を踏まえ、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」及び「医療的ケア」の領域に関する科目を順次性と系統性を考慮しながら配置する。
- (2) 選択科目には、福祉に関連したレクリエーションや医療・福祉事務等に関する知識と技能を修得するための科目を配置する。
- (3) 地域のニーズを踏まえ、地域に貢献する介護・福祉職に従事する者としての意識や知識・技能を高めるための科目を配置する。

《生活科学科食物栄養学専攻のカリキュラム・ポリシー》

食物栄養学専攻は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、専攻の専門教育を以下のように編成します。

- (1) 栄養士養成課程を踏まえ、健康の基盤となる食物と栄養に関する専門知識と技能を身につけるために、体系的かつ系統的に科目を配置する。
- (2) 人々の健全な食生活の実践に貢献できる人材の育成のために、給食管理や栄養指導等に関する知識や技能等を高める選択科目を設け、学生が主体的に専門性を高める環境を整える。
- (3) 地域社会のニーズを踏まえ、地域の食文化や食教育に対する興味や関心を高めるための科目等も多彩に取り入れる。

《教養学科のカリキュラム・ポリシー》

教養学科は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、学科の専門教育を以下のように編成します。

- (1) リベラル・アーツ科目には、心理、人間と社会、地域と観光及び国際理解の各分野の基礎知識と技能を修得するための科目を配置する。
- (2) キャリア・アドバンス科目には、時代の変化に対応しうる基礎力と現代的な「新しい教養」を修得するための科目に加え、地域に密着したキャリア教育を通して、社会に必要とされる人物像を理解し、自ら考え、地域社会に貢献できる能力を身につけるための科目を配置する。
- (3) その他、実務教育科目には、社会で必要とされる専門的な技能を修得できる科目を配置する。

【入学者受け入れの方針（アドミSSION・ポリシー）】

鹿児島女子短期大学は、建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」、教育理念「創造力・実践力に富み、家庭に社会に個人のもつ可能性を具現できる高い教養と人間性豊かな女性の育成」及び「国際的視野に立って社会の充実発展に寄与する人材の育成」に基づき、学習成果及びディプロマ・ポリシーに掲げた資質・能力を修得した人間を育成するために、以下のような入学者を求めています。

1. 高等学校等の教育における基礎的な知識・技能を有し、各学科・専攻の求める専門性を身につけようとする人
2. 本学の教養教育・専門教育に十分対応できる思考力・判断力・表現力を有し、課題解決に取り組む基礎的な資質をもつ人
3. 学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人

《児童教育学科のアドミSSION・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的としています。

本学科は、鹿児島女子短期大学のアドミSSION・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育における基礎的な知識・技能を有し、子どもの成長・発達に関わる専門性を身につけようとする人
- (2) 本学の教養教育・専門教育に十分対応できる思考力・判断力・表現力を有し、教育・保育の課題解決に取り組む基礎的な資質をもつ人
- (3) 学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人

《生活科学科生活福祉専攻のアドミッション・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉や医療・福祉事務の知識と実践的な福祉的援助の基礎を学ぶことを通じて、生物学的・社会的存在としての人間を理解し、将来、福祉、保健医療等の現場で使命感をもって働くことができる人材の育成を目指しています。

本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、介護福祉に対する探究心を有し、現実の社会問題に関心を向けつつ、介護福祉士や介護事務・医療事務に関する資格取得を目指す人を求めます。

- (1) 高等学校程度の教育課程を幅広く修得することを通じて、文章読解力や文章表現力、政治・経済・社会の仕組み等に関する基本的な知識及びコミュニケーション能力を身につけている人
- (2) 多様な人々への支援を通じて、社会に役立つ仕事をしたい人
- (3) 人々の喜びや悲しみを自分のこととして共感し、他者と協働することができる人
- (4) 幅広い教養を身につけて、深い人間理解ができる人

《生活科学科食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシー》

食物栄養学専攻は、給食実務に強く、的確な栄養指導と食教育ができる栄養士及び健康の基盤である食物と栄養についての専門知識と技術を身につけ、地域社会の人々の健康づくりに貢献できる人材の養成を目的としています。本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育における基礎的学力を備え、健康の基盤である食物と栄養についての専門性を身につけようとする人
- (2) 食や健康に対する知的好奇心が旺盛で、自ら考えて食に関わる課題の解決に取り組むことができる人
- (3) 人と人とのつながりを大切にし、食を通して自分の可能性に挑戦できる人

《教養学科のアドミッション・ポリシー》

教養学科では、教養教育と実務教育を柱とした実践的教育により、人生を豊かにする幅広い教養とコミュニケーション能力の育成を重視し、それに加えて職業人に必要な専門的スキル教育も行うことで、将来社会で広く活躍し、地域に貢献することができる人材の育成を目指しています。

本学科は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、何事にも挑戦しながら多様な社会体験をするに関心があり、基礎的な知識・技能と社会人基礎力を身につけ、地域社会に貢献しようとする意欲がある人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育課程を幅広く修得し、その学習を通じて、読解力・文章力・コミュニケーション能力を身につけている人
- (2) 学校内外での諸活動を通じて、自ら考え判断し、主体的な行動ができる能力を身につけている人

1. 児童教育学科

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

①入学試験

入学試験では、アドミッション・ポリシーに基づき、受験生の「基礎的知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」を判断している。

*高校教育の基礎的知識・技能

高等学校での教育における知識・技能に関しては、出願の際の調査書や取得資格、本学の課す学力試験・実技試験の結果、面接試験や論文試験等を通して総合的に判断している。例えば、調査書等で高等学校での成績や保育技術検定といった外部試験の結果を吟味したり、学力試験や論文において書く力や基礎知識の有無を測ったり、実技試験で絵本の読み聞かせ・歌唱・ピアノのいずれかを通して評価を行ったりしている。具体的には、総合型選抜の専門系試験において、幼保コースでは15名の受験者があり、15名全員が基準点を超える実技を行なった。

*思考力・判断力・表現力

思考力・判断力・表現力等に関しては、主に出願時の調査書（アピールシート）や面接、小論文の内容を通して評価を行っている。例えば、R6年度の学校推薦型選抜の小論文では、思考力・判断力・表現力それぞれに評価基準及び合格基準点を設け、それに則り採点している。この試験における受験者数、基準点を上回った学生数は表のようになった。

表1-1. 学校推薦型選抜の小論文の受験者数、基準点を上回った受験者数

コース		受験者数	基準点を上回った学生数			
			思考力	判断力	表現力	総合評価
小幼保	指定校型	16	13(81.6%)	11(68.8%)	12(75.0%)	11(68.8%)
	公募型	1	1(100%)	1(100%)	1(100%)	1(100%)
幼保	指定校型	41	36(87.8%)	37(90.2%)	37(90.2%)	29(70.7%)
	公募方型	1	1(100%)	1(100%)	1(100%)	1(100%)

表から分かるように、思考力・判断力・表現力、そして総合評価ともに基準点を上回る受験生の割合はコース及び形式で異なっており、きちんとした判断基準に則り審査していることが伺える。特に総合評価で基準点を下回る学生については、入試判定会議においてアセスメントポリシーの基準に照らしながら合格の可否を議論し入学後の指導についても検討している。

また、総合型選抜（専門系・児童教育学科）保育、音楽（歌唱）、音楽（ピアノ）の実技試験では、実技の「準備」、「態度」、「表現」等を評価している。受験者数、平均点、基準点を上回った受験者数は表の通りである。

表. 総合型選抜（専門系・児童教育学科）保育、音楽（歌唱）、音楽（ピアノ）の実技の受験者数、平均点、基準点を上回った受験者数

表2-2 基準点を上回った受験者数

コース	年度	受験者数	平均点	基準点	基準点を上回った学生数			
					総人数	評価基準①「準備」	評価基準②「態度」	評価基準③「表現」/「目的意識」
小幼保	R4	14	39.4	26	14(100%)	14(100%)	14(100%)	14(100%)
	R5	1	26	26	1(100%)	1(100%)	1(100%)	1(100%)
	R6	1	50	26	1(100%)	1(100%)	1(100%)	1(100%)
幼保	R4	31	38.9	26	17(100%)	31(100%)	30(97%)	31(100%)
	R5	17	35.7	26	17(100%)	17(100%)	17(100%)	17(100%)
	R6	15	34.8	26	15(100%)	15(100%)	15(100%)	15(100%)

R4、5年度に比べ、6年度では受験者数自体が減少しているが、基準点を上回った受験者は両コースともに100%であった。このことから、専門技能を用いる試験においてアセスメントポリシーに沿った学生を確保することができたことが分かる。

②入学前教育

入学後の実習実技や実習日誌作成に必要なピアノの技能やライティングの基礎知識などにおいて個人差がみられることから、入学予定者には本学独自の入学前課題として A)漢字の書き取り課題、B) ピアノ初心者・未経験者向け講習会を実施している。

入学前の課題については、離島を含む遠方の入学生もいることから、入学後の提出としている。R7 年度入学生については、入学者 137 名中 137 名が課題を提出し提出率は 100%であった。

課題に対する学生へのフィードバック方法については、解答プリントとともに課題を返却して、自己採点をさせた後、小幼保コースは 1 年後期、幼保コースは 2 年前期に、「幼児と言葉」の授業で、自己採点が完了しているか確認している。

また、入学前に入学後に学ぶピアノ実技について初心者・未経験者向けにピアノ講習会を開催している。R 7 年度入学生は入学者 137 名中 27 名が受講した。受講者には指使い等の実技指導を行うため、入学までに練習をする等で、入学時の初回レッスンでの合格率も高く、その後も授業時間外に質問に來たり、自主的に練習に取り組んだりする学生が多く、ピアノ実技の上達が早い傾向が続いている。

③新入生アンケート

入学時のアンケートで、受験に際し児童教育学科のアドミSSIONポリシーをよく読み理みして受験したかを確認したところ、155人中134人（86%）の学生が「はい」と回答した。この結果から、一定程度アドミSSIONポリシーが理解された状態で新入生が入学したと考える。

④総合評価

①～③の内容を鑑み、アドミSSION・ポリシーを満たした受験生が入学したと判断する。

（2）カリキュラム・ポリシーに基づく検証

①学習成果としてのG P A

学習の質を検証するために、GPAを取り上げる。令和3～6年度の児童教育学科入学生の平均G P A（最高：最低）を以下に示す。

表 2-1 GPAの平均、最大、最小

平均G P A	入学年	1 年次	2 年次
小・幼・保コース	R3	2.87 (3.34 : 1.65)	3.25 (3.73 : 2.22)
	R4	2.74 (3.63 : 1.82)	3.06 (3.73 : 1.88)
	R5	2.66 (3.63 : 1.63)	2.83 (3.69 : 1.66)
	R6	2.64 (3.46 : 1.57)	
幼・保コース	R3	2.55 (3.38 : 0.73)	2.89 (3.75 : 1.36)
	R4	2.50 (3.64 : 0.92)	2.75 (3.75 : 1.09)
	R5	2.49 (3.54 : 1.46)	2.74 (3.62 : 1.30)
	R6	2.39 (3.60 : 0.96)	

R5年度入学生のG P Aの平均値は小幼保コース、幼保コースのそれぞれにおいて1年次が2.5前後、2年次には0.2ポイント上昇し、2.8前後となっている。経年変化を見ると、R3年度入学生からR6年度入学生にかけて平均値が徐々に低下していることから、学生の実際に合わせ、教育内容・方法を常に改善していく必要性が示唆される。

②カリキュラム・ポリシーに対する科目配列

児童教育学科の専門科目は、児童教育学科カリキュラム・ポリシーを踏まえ、児童教育学科ディプロマ・ポリシーと連動し、以下の3つの科目群に分類される。

＊教育・保育に必要な専門性

＊課題解決能力

＊豊かな人間性

これらそれぞれの科目群について、開講学期ごとの配当状況をまとめると以下の表のようになっている。

表2-2 小幼保コース（小学校教諭・保育士・幼稚園教諭）の学期ごとの専門科目内訳

科目群	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	総合
①必要な専門性	11 (1)	12 (1)	16 (2)	12 (4)	51 (8)
②課題解決能力	0	2	4	2 (1)	8 (1)
③豊かな人間性	5	4	1 (4)	3	13 (4)
総科目数	16 (1)	18 (1)	21 (6)	17 (5)	72 (13)
一般教養科目	4	4 (1)	1 (1)	2 (1)	11 (3)

（括弧外が必修科目数、括弧内が選択科目数）

表2-3 幼保コース（保育士・幼稚園教諭）の学期ごとの専門科目内訳

科目群	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	総合
①必要な専門性	6 (1)	7 (1)	9 (2)	5 (4)	27 (8)
②課題解決能力	0	2	3	1	7
③豊かな人間性	5	3	1 (1)	1 (2)	10 (3)
総専門科目数	11 (1)	12 (1)	13 (3)	7 (6)	43 (11)
一般教養科目	4	4 (1)	1 (1)	2 (1)	11 (3)

（括弧外が必修科目数、括弧内が選択科目数）

以上のように一般教養科目を含めた全体の総科目数については、各学期においてバランスよく配置されているといえる。一方で、②課題解決に該当する科目は、実習及び実習指導、そして教職実践演習と環境教育演習しか該当する科目がない。各科目で何を重視するかに関して、教員個人の判断だけでなく、科目性と系統性を学科全体で検討する必要があると考えられる。

同様に、教科の系統性や順序性、整合性に関しては大きな改善の余地が伺える。講義科目と実践科目、指導法と内容学の順序性はそれぞれの科目の特性により考慮する必要がある、また演繹から実践へと向かう一般的な科目配列よりも経験から機能的に理論へと結びつける科目配列も本学生には相応しい可能性もあり、学科全体でカリキュラムツリー及びマップの確認をしながら学生の状況と時代に即応したカリキュラムの調整が求められるかもしれない。

③修得単位数

学習の量を検証するために取得単位数を検証する。R3年度からR6年度児童教育学科入学生の平均取得単位数（最高：最低）を以下に示す。

表2-4. 年次ごとの取得単位数

平均修得単位数	入学年	1 年次	2 年次	総修得単位
小・幼・保コース	R3	80.9 (83 : 61)	69.8 (84 : 33)	150.7 (167 : 94)
	R4	78.4 (80 : 28)	71.9 (85 : 3)	152.0 (165 : 94)
	R5	77.5 (80 : 41)	70.7 (84 : 27)	148.2 (162 : 68)
	R6	79.7 (80 : 76)		
幼・保コース	R3	66.0 (71 : 8)	39.5 (50 : 23)	105.9 (121 : 86)
	R4	62.9 (64:27)	42.0 (52 : 5)	106.0 (116 : 80)
	R5	62.8 (64:31)	42.8 (52 : 23)	106.1 (116 : 87)
	R6	63.1 (64:44)		

修得単位数「8」、「23」、「86」の最低値となった学生は、令和3年度の卒業延期者の値であり、卒業延期者を除く最低単位数は1年次「58」、2年次「23」、総修得単位「87」である。以上ことから、児童教育学科全体、小幼保コース、小幼保コースのそれぞれにおいて、最低修得単位数「62」を大幅に超えている。これは、免許・資格の取得に必要な最低取得単位数（小学校教諭二種免許状：幼稚園教諭二種免許状：保育士証）「85：66：92」が関わっているといえるが、学科として適切に学修が進められたと考える。

一方で、幼・保コースでは、1年次と2年次で26.5単位もの差が生じている。総修得単位を2年間で均等割した場合の約53単位と比べても、2年後期は13.5単位も少ないため、学期ごとの配当に関しては検討が必要と考える。

同時に学習時間に関して、1単位の授業は15時間の授業時間に規定予習復習時間である30時間を合わせた計45時間が必要となっている。すなわち、小幼保コースにおいて年間80単位を取得するためには計3600時間を確保する必要がある。

つまり、幼保コースに関しては2年間を通して授業の適切な配置と充実を、小幼保コースに関しては過重な授業数を検討していくことが求められる。

④教職履修カルテ

1年後期のキャリアガイダンス、2年前期の特設の時間、2 年後期の保育・教職実践演習の時間を利用し、学期ごとにこれまでの学修を振り返り、保育・教育に携わる実践者としての課題を明確にするために「履修カルテ」への記載を実施している。ホーム単位で「履修カルテ」を作成し、Microsoft Teams を利用し、提出している。「履修カルテ」では免許学習内容の振り返り、教育者・保育者としての実践的な能力に関する自己評価と課題点の記載をおこない、ホーム担任教員がコメントをつけて返却している。専門科目数が非常に多く、それぞれの科目ごとの丁寧な振り返り、関連科目ごとの統合した振り返りなどを取り上げた実施ができてないが、各学期の自己の課題を意識化する手立てとなっていると考えられる。

⑤実習所見・評価

令和5年度児童教育学科卒業生に対して、1 年次に幼稚園実習Ⅰ、保育所実習Ⅰがあり、2 年次に小学校実習（小・幼・保コース）、幼稚園実習Ⅱ（幼・保コース）、保育所実習Ⅱ、施設実習Ⅰを実施した。

それぞれの実習における評価については、A～Dの4段階（A：達成した、B：おおむね達成した、C：努力を要するが、おおむね達成した、D：全く達成できなかった）となっている。それぞれの実習における総合評価の結果を昨年度と比較しながら以下に示す。掲載の順番は実習の開講時期の順番とした。

表 2-5. 各実習における成績内訳

実習名	学期	学生	A	B	C	D
幼稚園教育実習Ⅰ	R3後期	183	30.1%	61.2%	7.7%	1.1%
	R4後期	196	21.4%	64.7%	13.8%	0%
	R5後期	163	27.6%	65.6%	6.1%	0.6%
保育所実習Ⅰ	R3後期	179	52.3%	44.0%	3.7%	0.0%
	R4後期	193	53.4%	41.0%	5.2%	0.5%
	R5後期	161	42.2%	49.7%	8.1%	0.0%
小学校教育実習Ⅰ	R4前期	46	76.1%	23.9%	0.0%	0.0%
	R5前期	43	79%	21%	0%	0%
	R6前期	28	75%	25%	0%	0%
幼稚園教育実習Ⅱ	R4前期	133	36.1%	54.1%	9.0%	0.8%
	R5前期	128	58.6%	34.3%	7%	0%
	R6前期	129	59.0%	31.5%	8.7%	0/8%
保育所実習Ⅱ	R4前期	181	65.2%	31.5%	3.3%	0.0%
	R5前期	158	67.1%	28.5%	4.4%	0.0%
	R6前期	132	62.3%	30.8%	6.9%	0.0%
施設実習Ⅰ	R4前期	175	56.0%	41.7%	2.3%	0.0%
	R5前期	184	50%	48.4%	1.6%	0.0%
	R6前期	154	46%	45%	9%	0%
全実習平均%			52.6%	42.7%	4.3%	0.3%
			56.0%	39.6%	5.3%	0.4%
			52.0%	41.3%	6.5%	0.1%

以上のように、年度による差は小さく、A評価、B評価となった学生の割合が全実習において8割を超えており、実習全体の平均%は90%を超えている。令和5年度卒業生に関して、C評価、D評価となった学生の割合が、一定程度おり、これらの学生に対する指導のあり方は引き続き課題として上げらえる。一方、A評価となった学生の割合は、その後の実習へと進むにつれて増加していることから、全体として適切に学習が進められていると言えよう。

一方で、全体として、職員・子ども（利用者）との関わりにおける距離感の調整、積極性などといったコミュニケーション力に関する指摘や、日誌の記録等での表現内容の充実、誤字脱字の改善といった記述力に関する指摘が見られた。これらコミュニケーション力、記述力等に関しては、各実習指導だけでは対応が難しい課題でもあるため、カリキュラムの検討や各授業で連携した対応が必要といえる。

⑥授業評価アンケート

授業評価アンケートの回答結果を元に、令和6年度児童教育学科卒業生がディプロマ・ポリシーを満たす人材になりえたかに関する回答を求めた。その結果を通覧したところ、どの教員も担当する科目における最も関連の深いDPに関して、概ね達成されたとの報告がなされている。

加えて、関連するその他のDPに関しても授業内において育成する観点を持って、2年間の中で断続的に取り組んでいることの報告もされている。それぞれの教員が、最も関連のあるDPを中心として、関連するDPに関しても育成を図る視点をもった授業がなされることにより、充実した人材育成が行われたと考えられる。今後は関連する分野、科目の教員同士で、連携、協働して人材育成を図るといった、教員間、学科での視点からも検討していく必要があると思われる。

⑦総合評価

上記6項目の検証より、児童教育学科のカリキュラム・ポリシーは学生の学習成果に効果的であると判断する。同時に、改善の余地も認められ、本学建学の精神に則り、常時時代に即応しながら変容を重ねる努力が必要であると考ええる。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

ここでは、児童教育学科の3つのディプロマ・ポリシーそれぞれに対し、検証していく。

①DPI 専門性に関して

令和6年度の児童教育学科卒業生のGPAを、過去2年と比較しながら数値に分けて整理したものを以下に示す。

表3-1. GPAの点数による振り分け

G P A	年度	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
小・幼・保コース	R4	37 名 (80.4%)	9 名 (19.6%)	0 名 (0.0%)
	R5	31 名 (64.5%)	16 名 (33.3%)	1 名 (2.0%)
	R6	13 名 (40.6%)	17 名 (53.0%)	2 名 (6.2%)
幼・保コース	R4	62 名 (45.3%)	71 名 (51.8%)	4 名 (2.9%)
	R5	49 名 (32.8%)	94 名 (63.1%)	6 名 (4.0%)
	R6	36 名 (28.8%)	81 名 (64.8%)	8 名 (6.4%)

児童教育学科全体では、R4年度卒業生ではGPAが「3.0 以上」の学生が半数以上を占めていたものの、R5年度では3未満2以上の学生が全体の55.8%、そしてR6年度では62.4%と増加傾向にある。小幼保、幼保の両コースともその傾向が顕著で、2未満となった学生も10名と下振れが見られる中、学修成果の質をいかに保つかが今後の課題となっていくと考えられる。

②DP2 課題解決能力に関して

児童教育学科では、専門的資格免許として、小幼保コースは小学校教諭免許二種、幼稚園教諭免許二種、保育士証、司書教諭資格、ピアヘルパーの計5種類が、幼保コースでは幼稚園教諭免許二種、保育士証、ピアヘルパー、認定絵本認定証の計4種類がある。そこで現場で実践できる能力を示す根拠として、R6年度の児童教育学科卒業生の免許資格の取得状況を挙げる。

表3-2. 小幼保コースの免許・資格取得率

	R4			R5			R6		
小・幼・保	学生数	取得者数	取得割合	学生数	取得者数	取得割合	学生数	取得者数	取得割合
小学校教諭	46	45	97.8%	46	43	93.5%	32	27	84.4%
幼稚園教諭		46	98.6%		43	93.5%		28	87.5%
司書教諭資格		11	23.9%		15	32.6%		10	31.3%
保育士証		44	95.7%		44	95.7%		27	84.4%
ピアヘルパー		1	2.2%		8	17.4%		6	18.8%

表 3-3 幼保コースの免許・資格取得率

	R4			R5			R6		
幼・保	学生数	取得者数	取得割合	学生数	取得者数	取得割合	学生数	取得者数	取得割合
幼稚園教諭	136	129	94.2%	144	135	93.8%	123	117	95.1%
保育士		132	96.4%		135	93.8%		115	93.5%
ピアヘルパー		22	16.1%		8	5.6%		8	6.5%
認定絵本士		25	19.2%		16	11.1%		9	7.3%

免許の取得状況は、R4年度と6年度の間に大きな違はなく、教育・保育の課題解決に必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力・人間関係調整能力等を有し、現場で実践できる人材として、それぞれの資格・免許を持った学生を育成することができた。その結果、令和6年度の「就職及び進学状況・率」は、99.3%となり、就職や進学を希望した全ての学生が、自身の将来を切り開いていく課題解決能力を育成することができたと判断する。

③DP3 豊かな人間性に関して

本学科では地域を志向した教育・研究・社会貢献を促すCOC 関連科目として1年次3科目、2 年次9科目が開講されている。

中でも1 年次の「キャリアガイダンス」では、附属幼稚園とのオンライン授業参観を通して具体的な保育内容や環境、幼児との関わりを見て学び、実習前には市内幼稚園での実務経験者による講話を通して職務や現場で求められる資質に関して具体的なイメージをもたせることができた。また、小幼保コース「小学校教職実践演習」では、小学校での授業参観を通して将来に向けた心構えや教師像の構築に繋がれたと考える。

さらに、小幼保コース選択科目「環境教育演習」では、屋久島での合宿研修を通して地域の自然環境や農業、食育にふれ、同じく「社会」の中で、枕崎や知覧での多様な体験を通して社会科における農業、水産業の教材化等について考察を行った。実際に地域を踏査することで地域理解が深まり、各地域のよさを踏まえて授業ができるような教師になろうという意欲を高められた。

これに加えて、両コース対象の「社会福祉」「子育て支援」では、地域の福祉的課題や福祉ニーズに即した講義、子育て支援に関する事例検討により、県内の社会福祉の動向と課題理解、対応の視点を習得させることができた。このことからCOC 関連科目による多様な学びを通して地域理解を深め、課題に向き合い、地域活性化の担い手として活躍できるような資質の基礎を培うことができた。

その結果、令和6年度卒業者155名の「就職及び進学状況・率」は、99.3%であり、専門職への就職の内訳は、以下の通りである。

表 3-4. 専門職への就職内訳

	小学校	幼稚園	こども園	保育所	福祉施設
R6:99.3%	7.6%(11人)	6.9%(10人)	30.7%(44人)	40.3%(58人)	6.9%(10人)
R5:99.4%	12.2%(24人)	7.7%(15人)	29.1%(57人)	29.6%(58人)	10.2%(20人)
R4:96.7%	12.2%(22人)	11.7%(21人)	27.3%(49人)	34.6%(62人)	10.6%(19人)

さらに年度を遡ると、内訳に変動があることが見てとれ、それぞれの学生が各自の特性に見合った専門性を見出していることが推測できる。

一方で、科目全体に目を向けると「豊かな人間性」に焦点を当てる科目は限定的であるものの、潜在的に関与しうる科目が多数あることから、教員間で連携を取りながら育てたい人間像と各科目でできることを確認し合う作業が必要かもしれない。

3.2 総合評価

上記3項目の検証より、児童教育学科ディプロマ・ポリシーに基づく人材育成ができていると判断する。

3. 生活科学科生活福祉専攻

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

①入学試験

○総合型選抜

総合型選抜で令和7年度に入学した学生は3名（一期全学科2名、一期専門系・生活福祉専攻1名）であった。アピールシート及び面接の各判定項目は3名とも基準点以上であった。令和6年度本試験で入学した学生1名（一期）も基準点以上であったことから、単純な比較にはなるが、いずれも基準点を上回ることのできる学生が入学していることが分かった。

○学校推薦型選抜（指定校型）

学校推薦型選抜（指定校型）で令和7年度に入学した学生は2名であった。「小論文」試験結果について検証する。「小論文」試験結果は、1名が基準点以上、1名は基準点以下であった。詳細をみると、2名とも誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満という点で基準点以下であり、それ以外の評価基準は基準点以上であった。前述したとおり、「小論文」試験結果としては、1名が基準点に達していないものの、「調査書」との総合的な判定を行った結果、合格であった。

令和6年度に本試験にて入学した学生は2名であったが、「小論文」試験結果は2名ともわずかに合格基準点に達していなかったものの、「調査書」との総合的な判断から合格となった。このことは、前述したとおり、令和7年度入学生2名とも同様の傾向がある。

総合型選抜及び学校推薦型選抜（指定校型）について、令和6年度入学生が3名であったことに対し、令和7年度入学生は5名に増加した。また、両年度ともにそれぞれの入試区分を選び、基準点を超えて合格に至っていることが分かった。

②新入生アンケート

「進学に関するアンケート」が実施されている。その結果、7名中6名が本学及び本専攻のアドミッション・ポリシーをよく読み理解した上で受験したと回答している。このことから、入学者にアドミッション・ポリシーは浸透していると考ええる。

③入学前教育

入学前教育として、これまで同様「介護福祉に関するスクラップ集作り」と高校までの学習を振り返る問題集型式の「ワークブック1」を仕上げることを求めた。また、新たに基礎的な国語力の確認と更なる充実を目指す目的で、問題集「基礎から学べる！文章カステップ文章検4級対応」を示し、取り組むことを求めた。4月には入学生全員から課題の提出があり、指導教員がチェックを行っている。「ワークブック1」については、5月に学習効果を確認（確認テスト）するために試験を実施し、試験結果を専攻内で共有した。指導教員による面談の際に、入学前教育によって専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物に成長したか確認を行っている。確認テストと面談の結果から、令和7年度も令和6年度に続き、入学生全員が生活福祉専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物により一層成長したと確認した。

令和7年度の「進学に関するアンケート」によれば、入学前課題の量は「多い」「やや多い」が大半を占め、難易度は「たいへん難しかった」「やや難しかった」が6名であり、易しいと感じた者（やや易しい1、易しい1）を上回った。また、入学前課題が入学後の学びの助けになりそうかについては、7名全員が「ややなっている」と回答している。令和6年度の結果は、入学前課題の量は「適量」が57.1%、難易度は「大変難しかった」が71.4%であったことから、難易度についての回答には変化はみられないものの、量について

ては差異があった。令和 7 年度入学生にとっての入学前課題は、量は多く、難易度も高いと感じてはいるものの、一方で入学後の学習の助けになるであろうと理解できているという点では学びを継続するという点で一定の効果があると考えられる。入学前課題の「ワークブックⅠ」は高校までの学習の振り返りができるものである。短大での学習の準備として、今後も入学前課題として用いていく必要があると考える。

④総合評価

①～③を総合的に評価した結果、本専攻の AP を満たした学生が入学していると考ええる。

(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証

①試験とその結果としての成績評価・GPA

令和 6 年度本専攻卒業生（10 名）の平均 GPA（最高：最低）は以下のとおりである。

表 2-1 平均 GPA

	1 年次（令和 5 年度）	2 年次（令和 6 年度）
平均 GPA	3.29（3.82：2.55）	3.38（3.81：2.91）

1 年次 2 年次ともに平均 GPA は 3 を超える結果であった。これは、令和 5 年度の卒業生と比較しても高い水準にあることが分かった。また、進級に伴い学ぶべき内容は専門性が増していくものの、平均 GPA は 1 年次よりも 2 年次の方が高くなっていることも特筆すべき結果であった。これらのことから、本専攻のカリキュラム・ポリシーに則った支援がなされているといえ、平均 GPA からみて高い学習成果が得られていると考える。

②修得単位数

令和 6 年度本専攻卒業生（10 名）の平均修得単位数（最高：最低）は以下のとおりである。

表 2-2 平均修得単位数

	1 年次（令和 5 年度）	2 年次（令和 6 年度）	総修得単位数
平均修得単位数	61.4（65：58）	47.4（49：44）	108.8（112：102）

全員総修得単位数は 100 単位を超えており、卒業に必要な最低修得単位数である 62 単位を大幅に上回っている。この結果は令和 5 年度卒業生と比べても同様の結果であった。100 単位を超える修得単位数であったことは、介護福祉士に必要な最低修得単位数である 100 単位が関係している。言い換えれば、令和 6 年度卒業生全員が介護福祉士を目指して、適切に学修した結果ともいえる。また総修得単位数からわかるとおり、介護福祉士に必要な修得単位数以上に学修しているといえ、学生らが主体的に学んだことが本結果に繋がったと考えられる。

③総合評価

① ②を総合的に評価した結果、本専攻の CP は学生の学修成果に効果的であると考ええる。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

①各 DP に対する検証

- ・専門的知識・技能（介護福祉及び介護事務に関する実践的かつ体系的な専門的知識と技能を修得している）の検証

令和 6 年度（以下、令和 5 年度入学生 9 名のことであり、過年度入学生 1 名は除く）に介護福祉士受験資格を得た者は 9 名であった。また、9 名全員が国家試験に合格したという結果であり、3 年連続で国家試験合格率 100%を達成することができた。ここには、留学生 1 名も含んでいる。

また、介護保険実務士認定証取得が 4 名（44.4%）、医事実務士認定証取得が 1 名（11.1%）であった。いずれの認定証を取得するためには、介護福祉士に必要な学習内容に加え、概論や演習などの独自の専門的な科目を学び、単位の修得が必須である。各資格取得の状況から、実践的かつ体系的に専門的知識や技能を修めたと考える。

次に、令和 6 年度本専攻卒業生（令和 5 年度入学生）の GPA 推移は以下のとおりである。

表 3-1 GPA 推移

GPA	令和 5 年度前期	令和 5 年度後期	令和 6 年度前期	令和 6 年度後期
3.0 以上 4.0 以下	9 (90%)	8 (80%)	8 (72.7%)	9 (90%)
2.0 以上 3.0 未満	1 (10%)	2 (20%)	3 (27.3%)	1 (10%)
1.0 以下 2.0 未満	0	0	0	0
1.0 未満	0	0	0	0

GPA 最高値は 4.0

学生異動（卒延 1、退学 1）を伴った結果ではあるが、2 年間を通じた GPA は高い水準で推移していることが分かった。GPA が 3.0 以上 4.0 以下の群の割合が多いことや 2 年間において各期の分布が同様に推移していることも特筆すべき点である。令和 5 年度卒業生では、GPA2.0 未満が僅かではあるがいたことからみても、令和 6 年度本専攻卒業生全員の学修到達度は高い水準であったといえる。

令和 6 年度卒業生（10 名）の就職状況は、医療保健 1 名、施設 9 名という結果であり、全員が介護福祉の専門職として就職していた。

以上のことから、DP①専門的知識・技能について、生活福祉専攻では実践的かつ体系的な専門知識と技能を十分に修得している人材を育成できたと判断した。

- ・主体的・創造的な課題解決能力（修得した専門的知識と技能を活かして、地域社会の実情を踏まえ、主体的・創造的に貢献する能力と意識を持っている）の検証

令和 6 年度本専攻卒業生（過年度入学生 1 名を除く 9 名分）の免許資格取得状況は以下のとおりである。

表 3-2 免許資格取得状況

	取得者数	取得割合
介護福祉士受験資格	9	100%
介護福祉士国家試験合格者数	9	100%
介護保険実務士認定証	4	44.4%
医事実務士認定証	1	11.1%
レクリエーション・インストラクター資格	0	0
日本茶アドバイザー資格	0	0
ピアヘルパー資格	0	0
介護コンシェルジュ（本学認定資格）	3	33.3%

令和5年度卒業生と比較すると、介護福祉士受験資格及び介護福祉士国家試験合格者数と介護保険実務士認定証、医事実務士認定証取得の割合は、介護保険実務士認定証取得の割合がやや低下はしたがその他は同様の取得状況であった。しかし、レクリエーション・インストラクター資格やピアヘルパー資格については、令和5年度卒業生は一定数取得しているものの、令和6年度の卒業生は0であった。その理由として考えられることは、2つの資格取得に必要な科目については、複数の学生は関連科目を履修し単位修得に至っているものの、最終的に資格取得のための登録料の負担や受験する必要性があったことが挙げられる。このことから、資格取得という形ではないものの、主体的・創造的に貢献する能力と意識は有していると判断できる。

新たに本学認定資格として、介護コンシェルジュを設けた。本資格取得のためには、「介護ホスピタリティ」及び「レクリエーション・ワーク」科目の単位修得、「介護の日」関連行事への参加が必須である。介護福祉士を主とする学習内容の他、関連科目として学生自らが選択し、地域社会での活動も行った結果として本資格の取得に至っている者が一定数いたことは特筆すべき点である。

介護福祉士の教育課程の中で、特に介護実習（福祉施設や事業所等での実習）では地域の社会的・人的課題に直面しながら、様々な実践を通して課題解決能力が磨かれている。本専攻の主軸である、介護福祉士受験資格に必須となる学修成果と全員が国家試験に合格し、介護福祉士の国家資格を取得できたということから、DP②修得した専門的知識と技能を活かして、地域社会の実情を踏まえ、主体的・創造的に貢献し得る能力や意識を持っている人材の育成できたと判断した。

・人間関係形成力とコミュニケーション能力（倫理観と責任感をもち、コミュニケーション能力と協働性を有し、多様な問題に臨む社会人としての態度を身につけている）の検証

本専攻の専門科目において、他者と自分との関わりを知り、コミュニケーションの意義を理解し、個人に合ったコミュニケーション技法を身につけることができる科目を履修する。また、介護の質を高めるために必要なチームマネジメントの基礎的な知識を理解し、チームで働くための能力を養う科目も履修することになる。

本専攻の専門科目において、DP③に該当する科目は以下のとおりである（カリキュラムツリー参照）。

表 3-3 DP③に該当する科目

1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期
コミュニケーション の基礎	人間関係と コミュニケーション	コミュニケーション演 習	チームマネジメント

令和6年度卒業生は、2年間を通じて順次性を考慮した学習をしており、単位修得もできていた。

また介護実習においては、介護福祉の現場において多様な方々と接する実践を通じて、人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力を磨いている。実習先からの評価や上記を中心とする講義・演習科目の単位修得ができていることから、DP③倫理観と責任感をもち、コミュニケーション能力と協働性を有し、多様な問題に臨む社会人としての態度を身につけた人材の育成ができたと判断した。

② 総合評価

①において行った「専門的知識・技能の検証」、「主体的・創造的な課題解決能力の検証」および「人間関係形成力とコミュニケーション能力の検証」の各結果から、令和6年度も本専攻のDPを満たす人材の育成ができたと判断した。

4. 生活科学科食物栄養学専攻

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

①学校推薦型選抜（指定校型）の受験者 15 名についての検証

小論文の平均点は 100 点満点中 77.87 点、基準点（60 点）を下回った者は 2 名（13%）であった。

参考として、過去 2 年間の受験状況は以下のとおり：

- ・令和 4 年度：受験者 29 名、平均点 68.38 点、基準点未満 5 名（17%）
- ・令和 5 年度：受験者 28 名、平均点 74.07 点、基準点未満 2 名（7%）

令和 6 年度は、前年度（令和 5 年度）より平均点が約 3.8 点上昇した一方で、基準点未満の割合は 2 倍近く増加した。

評価基準別の分析を表 1-1 に示す。評価基準ごとに基準点に満たなかった人数を見ると、令和 6 年度は特に【表現力】と【判断力】の項目で基準点未満の受験者が多く、それぞれ 7 名であった。また、「誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ」も他の年と同様に多くの受験者に見られた。

合否判定は、「小論文」試験と「調査書」の評価から総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

表 1-1 学校推薦型選抜（指定校型）における評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
【思考力】課題・テーマの正確な理解と分析ができているか（令和 5 年度まで：出題意図に沿っているか）	4 人	1 人	2 人
【表現力】内容をイメージしやすい説明と段落構成がなされているか（令和 5 年度まで：意見は明確であるか）	2 人	2 人	7 人
【判断力】読み手が納得できる矛盾、飛躍のない主張と理論展開ができているか（令和 5 年度まで：論理的・一貫性があるか）	1 人	0 人	7 人
分量が上限の 8 割以上ある	0 人	2 人	1 人
誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ	5 人	4 人	6 人

②総合型選抜（一期・二期・三期）の受験者 12 名についての検証

アピールシートの平均点は 50 点満点中 43.1 点で、基準点（32 点）を下回った受験者はいなかった。

過去 2 年間の結果と比較すると以下のとおり。

- ・令和 4 年度：受験者 4 名、平均点 44.5 点、基準点未満なし
- ・令和 5 年度：受験者 10 名、平均点 43.5 点、基準点未満なし

評価基準別に見ても、すべての項目（志望理由および自己アピールが十分に示されているか/気になるニュースの要約とそれに対する明確な意見/入学意欲の明確さ/記述分量が 8 割以上あるか/誤字・脱字・表現ミス・主述の乱れが 3 か所以下であるか）で基準点未満の受験者はいなかった。

面接における受験者の平均点は 50 点満点中 42.6 点であった。過去の結果と比較すると、

- ・令和 4 年度：平均点 45.0 点
- ・令和 5 年度：平均点 41.1 点

いずれの年度においても基準点（26 点）を下回る受験者はいなかった。

評価基準別に見ても、全ての項目（入学の目的意識/口頭試問に対する準備状況/面接時の態度）で基準点未満の受験者はいなかった。

合否判定は、「アピールシート」と「面接」に加え、「調査書」の評価から総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

③総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）の受験者2人についての検証

令和6年度の受験者2名におけるアピールシートの平均点は、20点満点中16.5点であった。過去の結果と比較すると、

- ・令和4年度：受験者4名、平均点17.0点
- ・令和5年度：受験者2名、平均点12.5点

いずれの年度においても基準点（10点）を下回った受験者はいなかったが、令和6年度は前年度（令和5年度）と比べて平均点が4点上昇した。

表1-3で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験者数をみると、令和4年度および令和6年度は全ての評価項目において基準点を下回る者はいなかったが、令和5年度は「資格取得の動機／理由／目的等」は2名とも、「取得後の資格の活用」は1人が基準点を下回っていた。

表1-2 総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）における
アピールシートの評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
資格取得の動機／理由／目的等	0人	2人	0人
資格取得に対する取組や意欲	0人	0人	0人
取得後の資格の活用	0人	1人	0人

令和6年度の受験者2名における面接の平均点は、40点満点中37.0点であった。過去の結果と比較すると、

- ・令和4年度：受験者4名、平均点37.8点
- ・令和5年度：受験者2名、平均点30.5点

いずれの年度においても、基準点（20点）を下回る受験者はいなかった。特に令和6年度は、令和5年度に比べて平均点が上昇した。

表1-4で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験生をみると、令和5年度では「面接時の質問に対する受け答えや態度」の項目で、1人が基準点を下回っていたが、令和4年度、令和6年度ともに、全ての評価項目で基準点を下回る者はいなかった。

表1-3 総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）における
面接の評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
資格の理解	0人	0人	0人
資格の取得状況	0人	0人	0人
資格取得への取組により得られた効果	0人	0人	0人
入学の目的意識及び 本学で学ぶことへの熱意	0人	0人	0人
面接時の質問に対する受け 答えや態度	0人	1人	0人

合否判定は、「アピールシート」と「面接」に加え、「高校時代に取得した資格」を加味して総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

④入学前教育

本専攻では、アドミッション・ポリシーの確認と定着を目的に、入学前教育として3つの課題を課し、入学後に提出してもらっている。3つの課題については以下の通り。

*「栄養バランスの良い朝ごはん作り」

令和4年度までは「入学前のチャレンジクッキング」として、指定された献立（ご飯、ハンバーグと付け合わせ、和え物、かき卵汁）を調理する課題を課していたが、令和5年度からは、より実生活に即した「栄養バランスの良い朝ごはん作り」に変更した。学生には、朝食の献立を自ら考え、使用した食材を6つの食品群に分類し、調理後の写真と共に、工夫した点や食後の感想をレポートとしてまとめて提出してもらう。この課題は、アドミッション・ポリシー（2）「食に関する基礎知識・調理技術の素地」と（3）「自ら学ぶ意欲と姿勢」の評価に活用している。また、提出された献立は、入学後の「調理学実習基礎」における実技試験にも連動させ、学修の一貫性を図っている。

*「計算問題」

実習や実験で必要となる割合や濃度などの基礎的な計算問題を課し、アドミッション・ポリシー（1）「科学的思考力の基礎」の確認に活用している。令和5年度からは、令和4年度の面談において多く見られた「計算でつまづいた」という声を受けて、専門教員による解説動画を新たに作成し、学生の理解を支援した。その結果、入学後の計算課題の正答率の一部に向上するなど、改善がみられる部分もあった。

*「描いてみよう あなたのキャリアプラン」

学生に将来の目標や取得を希望する資格・免許、就職について自由に記入してもらう課題で、アドミッション・ポリシー（3）の確認に活用している。提出された内容は、入学後の個別面談や学生指導の際の重要な資料としても活用している。

令和5年度は入学者39名全員、令和6年度も入学者33名全員が、すべての課題を提出しており、提出率は100%であった。各教員による評価でも、現時点で大きな問題は報告されていないが、今後は評価の客観性を高めるための評価基準や方法の検討も進めていく必要がある。

また、表1-5に示す入学後の「進学に関するアンケート」結果によると、課題の分量については、令和5、6年度ともに「ちょうどよい」との回答が大半（70～80%代）であった。課題の難易度については、令和5年度は「やや難しかった」が半数（50%）であったが、令和6年度には30%に減少し、「易しかった」「やや易しかった」が70%を占める結果となった。

今後は、どの課題のどの部分が難しかったか・易しかったかを、入学後の面談等で個別に確認しながら、より効率的に改善点を把握できるよう、課題ごとの評価項目やフィードバック方法の見直しを検討していく。あわせて、個々の理解度がより明確に可視化されるような評価方法と、それに応じた対応策の整備を進めることで、アドミッション・ポリシーに基づいた学生の成長を一層支援していくことが求められる。

表1-4 進学に関するアンケートの結果

	入学前課題の量				難易度		
	令和4年度	令和5年度	令和6年度		令和4年度	令和5年度	令和6年度
多い	2%	2%	11%	大変難しかった	9%	4%	2%
やや多い	16%	11%	8%	やや難しかった	27%	50%	28%
ちょうどよい	73%	85%	76%	やや易しかった	53%	26%	35%
もう少し多くてもよい	9%	2%	5%	易しかった	11%	20%	35%

⑤進学に関するアンケート

入学後に実施している「進学に関するアンケート」において、「生活科学科食物栄養学専攻のアドミSSION・ポリシーをよく読み、理解した上で受験したか」という問いに対し、令和6年度は97.1%の学生が「はい」と回答している。この数値は、過去年度（令和5年度：94.0%、令和4年度：87.0%）と比較しても高水準であり、年々上昇傾向が見られる。

これらの結果から、本専攻のアドミSSION・ポリシーが入学者に確実に浸透していると評価できる。

以上の結果から、食物栄養学専攻の入学者には、受験段階からアドミSSION・ポリシーの内容が十分に理解されており、ポリシーに合う学生が選抜されていることが確認できた。また、入学前教育も、入学者の成長をアドミSSION・ポリシーの方向に促す有効な手段となっている。

今後は、個々の理解度や達成度をよりの確に把握できる評価指標の整備と、それに基づく支援の強化を図ることで、入学後の学びがさらに効果的に展開されることが期待される。

⑥総合評価

学習成果を達成するために、以下のような「生活科学科食物栄養学専攻のカリキュラム・ポリシー」及び「生活科学科食物栄養学専攻のディプロマ・ポリシー」に従って教育課程を編成し、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与している。

（2）カリキュラム・ポリシーに基づく検証

①試験とその結果としての成績評価・GPA

令和5年度および6年度の本専攻卒業生の平均、最高および最低のGPA値を表2-1に示す。GPAの最低値は、令和5年度卒業生の1年次「1.13」、2年次「1.40」、令和6年1年次卒業生の「1.63」、2年次「1.25」であった。令和5年度、6年度ともGPAの最低値が「1.5」を下回っている学生は存在しているが、平均GPAはほぼ「2.5」以上を維持しているうえ、2年次の平均GPA値の方が1年次の値より上昇している。

表2-1 食物栄養学専攻卒業生の平均、最高および最低のGPA値

卒業年度	令和5年度	令和6年度
1年次	2.46 (3.95 : 1.13)	2.75 (4.00 : 1.63)
2年次	2.67 (3.85 : 1.40)	2.82 (3.96 : 1.25)

※ 平均GPA値（最高値：最低値）

表2-2に示すGPA値の分布でも、何れの年度の卒業生においても1年次に比べ2年次の方が、GPA「3.0以上4.0未満」の割合が増加し、「2.0以上3.0未満」および「1.0以上2.0未満」（や「1.0未満」）の割合が減少している。そのため、専攻として適切に学修が進められたと考えられる。

表2-2 食物栄養学専攻卒業生の1年次と2年次のGPA値の分布の割合（%）

卒業年度	令和5年度		令和6年度	
	1年次のGPA値の割合	2年次のGPA値の割合	1年次のGPA値の割合	2年次のGPA値の割合
3.0以上4.0未満	28.6	41.9	29.5	42.6
2.0以上3.0未満	35.7	44.1	63.6	51.1
1.0以上2.0未満	35.7	14.0	6.8	6.4
1.0未満	0.0	0.0	0.0	0.0

このように、2 年次には GPA が全体的に上昇し、学修の定着が見られたことから、専攻として学修指導は概ね適切に機能していると考えられる。一方で、1 年次の GPA が 1.5 を下回る学生が毎年一定数存在していることから、入学直後からの早期支援体制の強化や、初年次教育における学習習慣の形成や動機づけ支援の充実が今後の課題といえる。また、GPA のみでは学修成果の全体を把握するには限界があるため、多面的な評価方法の導入についても検討を進める必要もある。

②修得単位数

令和 4 年度および 5 年度の生活科学科食物栄養学専攻卒業生の修得単位数の平均（最高・最低値）は表 2-3 に示すとおりである。令和 5 年度卒業生の平均修得単位数は「77.9」、最低は「63」、令和 6 年度は平均「74.1」、最低「67」であり、いずれも卒業に必要な最低修得単位数（62 単位）を上回っている。ただし、全体として修得単位数は減少傾向にあり、これは令和 6 年度卒業生における栄養教諭二種免許状の取得者割合の減少（表 3-5 参照）が一因と考えられる。

また、1 年次と 2 年次の平均修得単位数を比較すると、令和 5 年度は 20.0 単位、令和 6 年度は 23.9 単位と、いずれも 1 年次の方が多くなっている。この偏りは、2 年次における実験・実習科目および選択科目の増加に起因するものであり、科目の順序性を保ったカリキュラム設計によるものといえる。一方で、2 年次の学外実習や就職活動の時間確保にもつながっており、一定の合理性がある。

今後は、学生の学修負担のバランスや、2 年間を通したより計画的な学びの支援を意識しつつ、履修設計の柔軟性や支援体制の充実もあわせて検討していく必要がある。

表 2-3 食物栄養学専攻卒業生の平均取得単位数

卒業年度	令和 5 年度		令和 6 年度	
平均修得単位数 (最高：最低)	1 年次	2 年次	1 年次	2 年次
	49.5 (65 : 35)	29.5 (42 : 17)	49.0 (66 : 47)	25.1 (40 : 20)
総修得単位	77.9 (107 : 63)		74.1 (106 : 67)	

※ 平均取得単位数（最高：最低）

③総合評価

本専攻では、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーに基づき、以下の 3 つの学修領域に沿った専門科目を配置している。

DP (1) 食物・栄養に必要な専門性

DP (2) 課題解決能力

DP (3) 豊かな人間性

これらの科目群ごとに、最も関連の深いディプロマ・ポリシー (DP) の配当状況を表 2-4 に示す。関連科目数は、DP (1)「専門性」が 41 科目、DP (2)「課題解決能力」が 12 科目、DP (3)「豊かな人間性」が 13 科目であり、特に専門性に関する科目が多く配置されている。

本カリキュラムは、まず健康の基盤となる食物や栄養に関する専門的知識・技能を段階的に習得し、それを基盤として、地域や現代社会の食の課題に対応する力を育む構成となっている。また、学内の COC 関連科目や、2 年次の学外実習を通じて、実践的な学びを深め、食を通じた地域貢献の機会を設けている。さらに、これらの学びを通じて、協調性や意欲、他者への思いやりといった豊かな人間性の涵養も意図されており、全体として体系的かつ系統的な教育内容が構築されている。

以上のことから、本専攻における科目配置は、ディプロマ・ポリシーに沿って順序性をもって構成されており、適切な学修成果が期待できるものと評価される。

表 2-4 令和 6 年度 of 食物栄養学 of 開講学期ごとの最も関連の深い DP の配当状況

科目群	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	各 DP 計
①必要な専門性	14	11	9	7	41
②課題解決能力	1	3	6	2	12
③豊かな人間性	2	1	5	5	13
総科目数	17	15	20	14	66

※令和 6 年度入学生カリキュラムマップおよび学生便覧参照

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

①食栄 DP (1) 食物・栄養に必要な専門性 (健康の基盤となる食物と栄養に関する専門的な知識と技能を修得し、時代と社会の要請に応える力を有しているかどうか) の検証

本専攻では、栄養士としての専門的知識・技能の修得状況を把握するため、全国栄養士養成施設協会が実施する「栄養士実力認定試験」を毎年全員受験している。この試験は、DP (1) で求められる「食物と栄養に関する専門性」の定着を確認する上で有効であり、学修成果の客観的な指標の一つとなっている。

令和 4 年度入学者 (令和 5 年度栄養士実力認定試験受験者) からは、「栄養士実力試験対策演習」を新たに導入し、模擬試験を年 2 回実施することで、受験に向けた基礎力の強化を図っている。令和 5 年度および 6 年度の試験結果 (表 3-1) によれば、本専攻の平均点は全国平均 (4 年制大学を含む) には及ばないものの、いずれの年度も短期大学の全国平均を上回っており、2 年間の教育課程における学修水準は一定の成果を挙げていることが確認できる。

さらに、令和 6 年度は 1 名が成績優良者として全国栄養士養成施設協会より表彰されており、全体として学修が順調に進められていると評価できる。ただし、A 判定の割合が前年より減少している点は課題であり、より早期からの学習支援体制の整備や、基礎学力の定着に向けた学習環境の充実が今後の重要な取り組みとなる。なお、B 判定にとどまった学生に対しては、弱点分野の傾向を分析し、個別指導や補講を行う体制の検討が求められる。また、演習や模擬試験の回数や内容も見直し、理解度に応じた段階的な学習支援の強化が今後の課題である。

表 3-1 令和 4 年度および令和 5 年度の栄養士実力認定試験の結果

正答率	60%以上	40~59%	39%以下	平均点		
	A 判定	B 判定	C 判定	本学	短期大学	全国
R5 年度結果	56.4%	41.0%	2.6%	51.87	49.84	53.43
R6 年度結果	53.5%	46.5%	0%	51.70	50.65	54.99

令和 5 年度および 6 年度の食物栄養学専攻卒業生の GPA を、「3.0 以上」「3.0 未満~2.0 以上」「2.0 未満」の 3 区分に整理した結果を表 3-2 に示す。令和 6 年度の卒業生では、「3.0 以上」の学生の割合は前年よりやや減少した一方、「3.0 未満~2.0 以上」の割合が 10.6 ポイント増加した。

しかし、「2.0 以上」の GPA を有する学生の割合で見ると、令和 5 年度は 86.1%だったのに対し、令和 6 年度は 95.3%と 9.2 ポイント増加しており、全体として GPA の底上げが図られていることがうかがえる。この背景には、令和 4 年度より導入された、科目の順序性を保持した体系的・系統的なカリキュラムが、学生の学修理解を促進したことがあると考えられる。

また、表 2-1 が示すように、両年度とも通年で GPA が 1.0 を下回る学生はおらず、基礎学力の確保という点でも一定の成果が見られる。

表 3-2 令和 5 年度および令和 6 年度食物栄養学専攻卒業生の GPA 値の分布

GPA	卒業年度	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
生活科学科	R5	18 名 (41.9%)	19 名 (44.2%)	6 名 (14.0%)
食物栄養学専攻	R6	17 名 (40.5%)	23 名 (54.8%)	2 名 (4.8%)

※ 実人数 (割合)

表 3-3 に示すとおり、卒業生のうち約 8 割が、食物や栄養の専門知識・技術を活かした職種への就職または進学をしており、例年安定した傾向が見られる。このことから、本専攻では専門的な知識と技能を備え、社会や時代の要請に応えうる人材の育成が概ね達成されていると評価できる。

表 3-3 就職および進学者の割合 (／卒業生) と食物や栄養の知識や技術を活かした職種での就職および進学した学生の割合 (／卒業生、%)

卒業年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
就職および進学者の割合 (／卒業生)	96.5	96.5	95.3
食物や栄養の知識や技術を活かした職種で就職および進学した学生の割合 (／卒業生)	78.9	81.4	86.4

※ 「食物や栄養の知識や技術を活かした職種」では、栄養士や調理員としての就職以外に、食関連企業への就職者を含んでいる。

②食栄 DP (2) 課題解決能力の検証

令和 4 年度および 5 年度卒業生の免許・資格取得状況は表 3-4 に示すとおりである。これらの免許・資格は、地域や現代社会の食に関わる課題を見出し、解決へと導くために必要とされる能力と深く関係している。特に、栄養士免許取得のための給食管理実習 (学外 I・II)、および栄養教諭二種免許取得に必要な学校給食管理実習 (学外 I) や栄養教育実習では、地域の社会的・人的課題に実際に触れることで、実践的な課題解決力が養われている。

また、令和 5 年度に新設した「こども食物アレルギー実務課程」では、受講者の約 9 割に修了証を発行することができ、社会的ニーズに対応した専門性の習得に寄与している。

さらに、表 3-3 に示すように、例年 9 割以上の学生が専門性を活かした就職・進学を果たしており、これらの実績からも、本専攻の教育課程において、地域や社会の課題を理解し、それに対応する力を在学中に身につけていると評価できる。

今後は、地域の多様な課題により的確に対応できるよう、実習先の多様化や、学生の課題発見・解決力を高める指導の工夫が求められる。また、資格取得に向けた学習支援や実務に即した教育内容のさらなる充実も、教育の質の向上に不可欠である。

表 3-4 卒業生の免許資格取得率 (%)

免許資格／卒業年度	令和 5 年度	令和 6 年度
栄養士免許証	90.7	97.9
栄養教諭二種免許証	7.0	2.3
こども食物アレルギー実務課程修了証	100.0	90.9
日本茶アドバイザー資格	18.6	15.9
ピアヘルパー資格	2.3	4.5

※ 各免許資格の取得率は、卒業生数に対する割合で示しており、令和 5 年度と令和 6 年度の卒業生数は、それぞれ 43 名と 44 名であった。

③食栄 DP (3) 豊かな人間性の検証

本専攻では、食に関する幅広い知識や関心を基盤とし、人々が健全な食生活を送るために、他者と目的を共有し協働できる力を育む科目群を設けている。〈資料〉に示す「豊かな人間性の検証が◎になっている専門科目」では、ほとんどの履修者が単位を取得しており、表 3-3 に示す就職・進学状況においても約 9 割の学生が専門性を活かした進路を選択していることから、学生は教育内容に充実感を持ち、豊かな人間性を身につけていると判断される。

一方で、他者との協働力やコミュニケーション能力のさらなる向上を図るため、グループワークや地域連携プロジェクトの充実、対話型授業の導入など、実践的な教育方法の強化が今後の課題である。また、多様な価値観に触れる機会を増やすことで、より深い共感力と多文化理解の促進を目指す必要がある。

これらの取り組みによって、豊かな人間性のさらなる育成と、社会の多様なニーズに応えられる人材の輩出が期待される。

〈資料〉

食栄 DP (3) 豊かな人間性の検証 が◎になっている専門科目

- ・ 栄養指導実習 I
- ・ 栄養指導実習 II
- ・ 給食管理実習 (学外 I)
- ・ 実践調理学実習
- ・ 暮らしとお茶 A
- ・ 暮らしとお茶 B
- ・ 教育制度論
- ・ 特別支援教育
- ・ 道德教育の指導法
- ・ 特別活動の指導法
- ・ 栄養教育実習指導
- ・ 栄養教育実習
- ・ 教職実践演習 (栄養教諭)

④総合評価

検証結果から、本専攻においては「カリキュラム・ポリシー」に沿った計画的な学修が適切に実施され、「ディプロマ・ポリシー」が示す能力・資質を備えた人材が着実に育成されていることが確認された。今後も継続的な教育改善と学生支援を通じて、社会の変化や多様なニーズに柔軟に対応できる、より高度で豊かな人材育成を目指していく必要がある。

5 教養学科

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

アドミッション・ポリシー (以下 AP) に掲げている①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性、の 3 点について、入学試験と入学前教育課題が分析、検証対象となる。まず、前者に関しての検証については、令和 7 年度入学者 (令和 6 年度入試実施) に対して実施した入試のうち、学校推薦型選抜と総合型選抜について行うこととする。これら 2 つの選抜方法で入学者の 89.5% を占めていることから、本学入学者の大勢の検証ができると考えられるためである。

①入学試験

学校推薦型選抜（指定校型）

判定は小論文と調査書による総合評価である。

○小論文

受験者 23 人について検証した。合計点の平均点は 100 点満点で 76.6 点、各評価基準別の平均点は表 1.1 の通りである。

表 1-1 学校推薦型選抜（指定校型）小論文 評価基準別の平均点

評価基準	満点	基準点	平均点
【思考力】課題・テーマの正確な理解と分析ができているか	28	16	18.7
【判断力】読み手が納得できる矛盾、飛躍のない主張と論理展開ができているか	28	16	17.83
【表現力】内容をイメージしやすい説明と段落構成がなされているか	28	16	17.3
分量が上限の 8 割以上ある	10	10	10
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが 3 種類未満である	6	6	6
計	100	64	76.6

評価基準別で基準点（64 点）を下回っていた者の割合は表 1.2 のとおりである。①を測る評価基準において基準点を下回った者はいない。一方、②を測る【思考力】・【判断力】、②および③を測る【表現力】において、それぞれ基準点を下回っている受験者が見られる。特に表現力に関しては弱い傾向が示されているが、調査書から読み取れる入学の目的意識の明確さや就学意欲の高さを加味して総合的に評価すると、概ね評価基準を満たしていると考えられる。

表 1-2 学校推薦型選抜（指定校型）小論文
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

評価基準	基準点以上	基準点以下
【思考力】課題・テーマの正確な理解と分析ができているか	21 人 (91.3%)	2 人 (8.7%)
【判断力】読み手が納得できる矛盾、飛躍のない主張と論理展開ができているか	18 人 (78.26%)	5 人 (21.74%)
【表現力】内容をイメージしやすい説明と段落構成がなされているか	16 人 (69.57%)	7 人 (30.43%)
分量が上限の 8 割以上ある	23 人 (100%)	0 人 (0%)
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが 3 種類未満である	23 人 (100%)	0 人 (0%)

総合型選抜（一期・二期・スポーツ全学科）

判定はアピールシートと面接、調査書による総合評価である。

○アピールシート

受験者 13 人について検証した。受験者 13 人の平均点が 41 点で、基準点（32 点）を下回る者はいなかった。評価基準別の平均点は表 1.3 のとおりである。

表 1-3 総合型選抜（一期、二期）アピールシート 評価基準別の平均点

	満点	基準点	平均点
志望理由及び自己アピールが十分に示されているか	10	6	8.31
気になるニュースの要約ができており、それに対する意見は明確であるか	10	6	7.69
入学したい意欲が感じられるか	20	10	15
分量が 8 割以上ある	5	5	5
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが 3 種類未満	5	5	5
計	50	32	41

評価基準別では、すべての評価基準において基準点を下回る者はいなかった（表 1-4）。

表 1-4 総合型選抜（一期、二期）アピールシート
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

評価基準	基準点以下
志望理由及び自己アピールが十分に示されているか	0 人（0%）
気になるニュースの要約ができており、それに対する意見は明確であるか	0 人（0%）
入学したい意欲が感じられるか	0 人（0%）
分量が 8 割以上ある	0 人（0%）
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが 3 種類未満	0 人（0%）

○面接

受験者 13 人について検証した。合計点の兵権店が 37 点で、基準点（26 点）を下回る者はいなかった。

表 1-5 総合型選抜（一期、二期）面接 評価基準別の平均点

評価基準	満点	基準点	平均点
入学の目的意識：志望学科・専攻・コースについて理解し、出願の動機が明確であるか	20	10	14.14
口頭試問課題への準備：自ら選んだテーマについてよく調べられているか、よく発表できたか	20	10	12.79
態度：服装・マナーは適切であるか、表情が明るくコミュニケーション能力があるか	10	6	7.71
合計点	50	26	37

評価基準別では「口頭試問課題への準備」、「態度」で基準点を下回った者がそれぞれ１人いたが（表 1.6）、合計点では基準点を超えているので評価基準を満たしていると考ええる。

表 1-6 総合型選抜（一期、二期）面接
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

評価基準	基準点以下
入学の目的意識	0 人 (0%)
口頭試問課題への準備	1 人 (7.69%)
態度	1 人 (7.69%)
合計点	0 人 (0%)

総合型選抜（専門系・教養学科）

判定は面接、取得資格、調査書による総合評価である。

○面接

受験者 6 人について検証した。60 点満点の評価で合計点の平均点は 49.3 であり、基準点（36 点）を下回る者はいなかった。また、評価基準別においても、基準点を下回った者はいなかった（表 1.7）。

表 1.7 総合型選抜（専門系・教養学科）面接 評価基準別の平均点及び
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

評価基準	満点	基準点	平均点	基準点を下回った者
資格取得の経緯や活用	10	6	8.17	0 人 (0%)
高校時代の学びや活動への取り組みおよびそこから得られた効果	10	6	7.67	0 人 (0%)
本学教養学科入学の目的意識	10	6	8.67	0 人 (0%)
本学教養学科で学ぶことの熱意	10	6	8.17	0 人 (0%)
面接時の質問に対する受け答え	10	6	8	0 人 (0%)
面接時の所作・言葉遣い	10	6	8.67	0 人 (0%)
合計点	60	36	49.3	0 人 (0%)

総合型選抜（情報・全学科）

判定は面接、取得資格、調査書による総合評価である。

○面接

受験者 1 名について検証した。「平均点」としているが、1 名であるので当該受験者の点数となる。結果は 60 点満点中 56 点で、基準点を大幅に上回っている（表 1.8）。

表 1.8 総合型選抜（情報・全学科）面接 評価基準別の平均点及び
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

評価基準	満点	基準点	平均点	基準点を下回った者
資格取得の経緯や活用	10	6	8	0 人 (0%)
高校時代の学びや活動への取り組みおよびそこから得られた効果	10	6	9	0 人 (0%)
本学教養学科入学の目的意識	10	6	10	0 人 (0%)
本学教養学科で学ぶことの熱意	10	6	10	0 人 (0%)
面接時の質問に対する受け答え	10	6	9	0 人 (0%)
面接時の所作・言葉遣い	10	6	10	0 人 (0%)
合計点	60	36	56	0 人 (0%)

②入学前課題

課題の量・難易度の検証

令和 7 年度入学生への入学前課題は、全員対象課題の「課題 1 世の中のニュースをチェックする」「課題 2 気になる仕事について調べる」と、選択課題の「課題 3 読書の記録」「課題 4 生き方のモデルになる方を探す」があり、すべて入学後の提出としている。

提出状況に関しては、全員提出されているものの、1 人は全員対象課題の課題 2 を提出しておらず、代わりに選択課題である課題 3 と 4 の両方を提出しており、1 人は課題 2 の提出がなかった。課題内容自体は令和 6 年度と変更はないものの、課題 1 に関しては新聞からニュースを切り取るのではなく、NHK の「大学生とつくる就活応援ニュースゼミ (https://www3.nhk.or.jp/news/special/news_seminar/)」からニュースをピックアップし、概要と感想を書くというものに変更となっている。

「2025 進学に関するアンケート結果」（令和 7 年 4 月実施）では、分量については「ちょうどよい」が 89.6%、「やや多い」が 10.4%であった。難易度については「やや難しかった」が 54.2%、「やや易しかった」が 33.3%、「易しかった」が 12.5%であった。令和 6 年度と比較して、7 年度は量が「ちょうどよい」に一極化し、他には「やや多い」以外の選択肢を選んだものはいなかった。難易度については「易しかった」が大幅に減少し、「やや難しかった」が半数以上に大幅上昇した。一方、「やや易しかった」は横ばいで、「たいへん難しかった」と答えた者はいなかった。

分量に関して、「ちょうどよい」と答えた者が令和 6 年度に比較して大幅に上昇してほぼ一極化し、「多い」・「もう少し量があってもよい」という両極的な答えを選んだ者がいなかったことは、令和 7 年度の入学前課題の量が、より適度なものとなっていることを示しており、無理なくこなすことのできる課題となっていることが伺える。難易度に関しては「やや難しかった」が大幅に増えたものの、一方で「やや易しかった」は横ばいで、「易しかった」と合わせると半数に近い値となり「やや難しかった」と 10 ポイントしか差がない。

「大変難しかった」を選んだ者がいなかったことから、難易度に関しても易しすぎず、かといって難しすぎるわけでもない適切な難易度となっていることが伺える（表 1.9）。

表 1-9 入学前課題の量・難易度に関する意識

		令和 7 年度	令和 6 年度
量	多い	0 人 (0%)	22 人 (37%)
	やや多い	5 人 (10.4%)	2 人 (3%)
	ちょうどよい	43 人 (89.6%)	34 人 (58%)
	もう少し多くてもよい	0 人 (0%)	1 人 (2%)
難易度	たいへん難しかった	0 人 (0%)	2 人 (3%)
	やや難しかった	26 人 (54.2%)	6 人 (10%)
	やや易しかった	16 人 (33.3%)	18 人 (31%)
	易しかった	6 人 (12.5%)	33 人 (56%)

(出典：「進学に関するアンケート」各年度 4 月実施)

アドミッション・ポリシー 3 項目の検証

検証するにあたっては、アドミッション・ポリシーとそれぞれの課題で提示していた指示内容とを、次ページの表 1-12 のように対応させた。ここでは全員対象の「課題 1」、「課題 2」について、入学者 52 人の提出物について検証した。

a. 高校教育の基礎的知識・技能

指示に従っているか、という指標で検証した。課題の指示は以下の通りである（表 1-10）。

表 1-10 課題の指示内容

課題 1 世の中のニュースチェック	課題 2 気になる仕事について調べる
取りあげたニュース名 (3 種類) 記事年月日 ニュースの概要 そのニュースを選んだきっかけ 感想	調べた会社等の名前や職種 調べてわかったこと (調べたときに利用した資料名) 調べて疑問に思ったこと その仕事をめざすために必要なこと 資格の要不要/資格以外に必要なこと

指示に従っているものを 5、従っていないものを 1 として 5 段階で評価した（表 1-11）。

表 1-11 課題が指示通りに取り組まれたかの検証

	5	4	3	2	1	未記入
課題 1	36 人 (69.2%)	2 人 (3.8%)	3 人 (5.8%)	9 人 (17.3%)	2 人 (3.8%)	0 人 (0%)
課題 2	36 人 (69.2%)	7 人 (13.5%)	6 人 (11.5%)	1 人 (1.9%)	1 人 (1.9%)	1 人 (1.9%)

課題 1 について 5 段階評価の 2 が多くなっているのは、ニュースを 3 種選ぶところは全員できていたが、ニュース名や概要の記載ができていない人が多かったためである。ただし、指示の仕方がわかりにくかった可能性もあり、次年度の課題作成へ向けての反省が見えた。他は記述の量・質に差はあるが、指示に従って課題に取り組むことができているといえる。

表 1-12 入学前課題の内容とアドミッション・ポリシーとの関連

			(1) 高校教育の 基礎的知識・技能	(2) 思考力(①)・ 判断力(②)・表現力 (③)と課題解決に 取り組む姿勢(④)	(3) 意欲と協調性 のうち、「意 欲」
全 員	課題 1「NHK 就活応援ニ ュースゼミ」 からニユー スを選ぶ	a. ニュースを選んだきっかけ を書く	課題の指示に 従っているか	①②③自分の意見 が明確である。 c. ニュースの感想 で評価	分量 ・記事数 ・記述量
		b. ニュース内容の概要を書く			
		c. ニュースの感想			
	課題 2 気になる仕 事を調べる	a. 調べた会社の名前・職種	課題の指示に 従っているか	④「目指すために 必要なこと」が具 体的である。 d. で評価	分量
		b. 調べて分かったことを書く			
		c. 調べて疑問に思ったことを 書く			
		d. その会社やその職種を目指 すために必要なことを書く			
選 択	課題 3 読書の記録	a. 本のデータ	課題の指示に 従っているか	①②③自分の意見 が明確である。 c. で評価	分量 ・読書量 ・記述量
		b. 読んだきっかけ			
		c. 考えたこと・感想を書く			
		d. 覚えておきたい言葉、良か ったところを書き写す			
	課題 4 生き方のモ デルになる 方を探す	a. 紹介したいステキな方を書 く	課題の指示に 従っているか	④「どうすればよ いか」が具体的で ある c. で評価	分量
		b. その方のどこが魅力的なの かを書く			
		c. その方に近づくためにどの ようなことをすれば良いかを 書く			

b. 思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢

○思考力・判断力・表現力

「課題 1」の「感想」について、自分の意見の明確性を検証指標とする。

例えば、取り上げたニュースに関して、以下のような感想があり、世の中の出来事を他人事ではなく自身にも関係があると捉える視点の感想が多く見られた。

- ・今は誰もが簡単に情報を得ることができる時代だ。昔は情報が少なすぎることで問題が起こったが、今後は情報が多すぎることで問題が起こる可能性がある。多すぎる情報に惑わされることなく、クローン技術などの様々な技術に関する情報を正しく得られるようにしておくべきだと思う。[ニュース名：着床前の遺伝子検査はどこまで認められるか]
- ・現在、物価が上がって苦しい状況の中で、さらに関税がかかると日本の経済はどうなってしまうのかと心配になった。これからトランプ大統領がどのような行動を取るのか、そして日本はどのように対応していくのかを知ることができるようニュースを見たり読んだりしていきたい。[ニュース名：就任 1 ヶ月 “トランプ 2.0 に振り回される世界”]

- ・災害に関連した要因で亡くなる方がこんなに多いとは知らなかったため、記事を読んだときには驚きました。また、被害に対しての支援制度があり、自ら申し込まなければならないということも、この記事で知ることができました。私の住んでいる所でも近い将来大きな地震が起これと言われているので、もし被害に遭ったときにはこれらの情報を活かしていきたいと思います。[ニュース名：能登半島地震から1年～被災者に寄り添う支援を]

一方で、後述する意欲（分量）と関連するが、感想の分量が少ない（100字以内）場合は意見が明確ではないものも散見された。また、「〇〇がなくなってほしい」「〇〇になればよいと思う」など、他人事感が表れている感想も見られた。とはいっても、「〇〇について知ることができた」、「〇〇だと知って驚いた」などという感想も多く、感想の書き方としては不十分だとしても、このような課題に触れることで社会への関心が高まるであろう。この課題は、APに謳っている「地域社会に貢献しようとする」意欲を入学前に醸成する役割を担っていると考えられる。

○課題解決に取り組む姿勢

「課題2 気になる仕事を調べる」の「目指すために必要なこと」について、記述の具体性を検証指標とする。調べた仕事については職種を調べた者、企業を調べた者などさまざまであり、職種については例えば以下のようなものがある（①②③は3人の学生の記述を記載している）。

【具体的な記述例】

- ・図書館司書：①司書資格をもっていること／読書好きであること、コミュニケーション能力、整理整頓能力など
②司書資格／情報収集能力と情報整理能力、コミュニケーション能力、コンピュータ操作のスキル、読書活動推進のための企画能力
③司書資格／記憶力、忍耐力、コンピュータ処理能力、資格を取った後は地方公務員・民間採用試験を受けて合格する必要がある
- ・グランドスタッフ：①一般的な採用ルート／資格や採用条件：学歴や語学の採用基準を設けている会社が多い（具体例略）／グランドスタッフに求められること：時間に性格であること、体力・体調面の管理、接客マナー、臨機応変な対応力
②学歴と英語力（具体例略）／観光英語検定やサービス接客検定などの取得、自己管理能力や柔軟な対応能力・判断力
- ・WEBデザイナー：①資格（具体例略）／スキルや知識：プログラミングスキル、マネジメントスキル、illustratorやPhotoshopのスキル、デザインに関する知識、Webマーケティングに関する知識
②資格（具体例略）／HTMLやCSS、画像データの加工などのスキル、プロダクトデザイン的な要素を意識するスキル、ユーザーが使いやすいことや見やすいかどうかを意識するスキル、プロジェクト管理スキル
- ・ウェディングプランナー：①ブライダル全般やドレス、マナー、一般常識など／コミュニケーションスキル、企画・提案力、柔軟な対応力、ホスピタリティ／役立つ資格（具体例略）
②資格：必ずしも必要ではないが持っていたら有利になる資格はある（具体例略）／コミュニケーションスキル、企画・提案力、柔軟な対応力

具体的記載例に見られるように、「必要なこと」を記載するにとどまっており、その必要なことを身につけたり能力を向上したりさせるために自身がどのように行動するか、というところまで記述している人は

ほとんどいなかった。課題での指示をしていなかったこともあり、入学前にそこまで考えるという思考にたどり着かないのもやむを得ないかもしれない。しかし、入学後1年後には就活が始まるので、この課題を通して入学後のキャリア教育でフォローが必要だということが明らかになったといえる。

c. 意欲と協調性

意欲と協調性については「課題1 世の中のニュースチェック」、「課題2 気になる仕事を調べる」とも分量で検証することとする。

○課題1 世の中のニュースチェック

A:感想の分量

おおよそであるが、ニュース記事1つあたりの感想の平均分量は、表1-13の通りである。課題内容を変更したが前年度と比較して分布に大きな差はないといえる。

B:取り上げた記事の数

ニュースサイトの「トップニュースが1からわかる!」「もっと知りたい大事なニュース」「世界のニュースがもっとわかる」各カテゴリーから一つ選択するという課題だったことから、ほとんどの人は取りあげたニュース数は3つだった(51人、98.1%)。4つ取りあげていた人は1人だった(1.9%)。

表1-13 課題1 世の中のニュースチェック」の感想分量

	100字未満	100～200字	200～300字	300～400字	400字以上
令和6年度	17人 (28.8%)	26人 (44.1%)	9人 (15.3%)	6人 (10.2%)	1人 (1.7%)
令和7年度	17人 (32.7%)	20人 (38.5%)	11人 (21.2%)	2人 (3.8%)	2人 (3.8%)

○課題2 気になる仕事を調べる 記述の分量

B5版ノートで課題を提出した学生が多かったことから、ノート(B5版)の分量で換算した。6年度入学生と比較すると若干記述量は少なくなっているが、8割を超える学生がB5版ノート4分の3ページ以上は記載しており、意欲的に課題に取り組んだといえる。

表1-14 課題2 気になる仕事を調べる 記述量

	半分程度かそれ以下	4分の3程度	1ページかそれ以上
令和6年度	8人(13.8%)	7人(12.1%)	43人(74.1%)
令和7年度	9人(17.3%)	14人(26.9%)	29人(55.8%)

③総合評価

入学試験の評価対象は専願系入試の学校推薦型選抜(指定校型)、総合型選抜(一期、二期、専門系・教養学科、情報・全学科)である。これらの入試による入学者については、いずれも選抜方法においても、調査書の審査を加味しつつ、①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性、を総合的に評価した結果、本学のAPを満たした学生が入学していると判断できる。

また、入学前課題については、一部指示通りの取り組みができていない人もいたが、全員が提出しており、APに謳っている「地域社会に貢献しようとする」意欲を入学前に醸成する役割を担っていると考えられる。全員への課題である「世の中のニュースチェック」及び「気になる仕事について調べる」について、詳細に内容を検証したが、6年度入学生と比較しても取り組みの大きく変化はなかった。個々の取り組んだ課題量や内容の差はあるが、取り組みの姿勢から、本学のAPを満たした学生が入学していると考えられる。

なお、“入学後の学習や就職活動に向けて、パソコン操作に慣れておくことをお勧めします”と課題に記載していたが、実際の提出物については、「手書き」が28人、「パソコンで作成」が24人であった。入学前課題に取り組むにあたってのネットや印刷環境などを調査する必要があると思われる。

(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証

①試験とその結果としての成績評価・GPA

令和5年度と令和6年度の教養学科卒業生の平均GPA（最高：最低）を表2.1に示す。

なお、卒業延期者は含まない。

表2-1 教養学科卒業生の平均GPA（最高：最低）

R5卒業生 平均GPA	1年次－R4－	2年次－R5－	通算－R4・5－
	2.87 (3.96 : 1.29)	3.06 (4.00 : 1.27)	2.96 (3.98 : 1.56)
R6卒業生 平均GPA	1年次－R5－	2年次－R6－	通算－R5・6－
	3.00 (3.66 : 1.20)	3.13 (3.83 : 0.92)	3.06 (3.74 : 1.06)

令和5年度に入学し令和6年度に卒業した学生の最低GPAは1年次1.20、2年次0.92である。教養学科の成績不振者GPA2.0未満は1年次2名おり、2名ともが2年次も2.0未満であった。その他学生については、学年毎、通年ともGPAが3.0以上となっている。令和5年度と比較し、2年次のGPA1.0未満が1名いるにも関わらず全体として微増し、令和4年度から継続した増加となった。GPAが2.0未満の学生に対しては、指導教員による指導を適切に行った。そのため、学科として適切に学修が進められたと考える。

②修得単位数

令和5年度と令和6年度の教養学科卒業生の平均取得単位数（最高：最低）を表2.2に示す。なお、卒業延期者は含まない。

表2-2 教養学科卒業生の平均取得単位数（最高：最低）

R5卒業生 平均修得単位数	1年次－R4－	2年次－R5－	総修得単位
	51.7 (65 : 34)	28.9 (52 : 16)	80.6 (113 : 62)
R6卒業生 平均修得単位数	1年次－R5－	2年次－R6－	総修得単位
	50.5 (70 : 38)	26.5 (60 : 12)	77.1 (130 : 63)

令和5年度に入学し令和6年度に卒業した学生の最低修得単位数は、1年次38単位、2年次12単位、総修得単位数は63単位である。卒業生70名のうち70単位以上を修得したのは48名である。100単位を超えた学生は4名いた。なお、表に加えなかった令和5年度の卒業延期者2名はそれぞれ64単位、80単位の修得であった。

令和5年度と比較し、70単位未満は22名と昨年度から継続で増加し、全体として総修得単位数の減少がみられた。その他、資格取得希望の有無で大きく修得単位数に差がでるものの、多くの学生が最低修得単位数を超える単位を修得していることから、学科として適切に学修が進められたと考える。

③専門科目 分野別科目

リベラルアーツ

「a 心理」「b 人間と社会」「c 地域と観光」「d 国際理解」の4領域があり、必修科目はc)「かごしまのダイナミズム」「地域とマスメディア」、d)「言語・文化の多様性」の3科目、他の多くは選択必修となってい

る。前2者については、地元テレビ局を含む外部講師による講義やテレビ局見学等を実施、地元事業所に就職する学生にとって必要な鹿児島に関する学びや、社会の一端を知る有益な学習がなされたと考える。後者については「様々な国の言語や文化について、視野を広く見ることが出来た」「それぞれの国によって文化が違うことや色々な歴史があることを改めて感じ興味深いと思ったり残酷であると胸が痛くなったりした」という意見から、リベラルアーツ科目の「国際理解の基礎知識と技能を修得する」という点に則って学修が進められたと評価できる。

「心理」領域において、授業アンケートでは「生涯発達心理学」で「心理学に興味があったため、学習することができて良かった。」「心理的なことについて理論的に色々学べた」、「人間関係とコミュニケーション」で「他者を理解する手段や、自分を理解する材料としてある程度分類できるようになった」「日常生活でしている自分の行動や心理について、詳しく知ることができた」などの回答、「社会心理学」では最終レポートの中で「人々の心理と行動は相互作用しているのだと気づいた」といった記述が見られ、リベラルアーツ科目の「心理」分野の基礎知識と技能を習得するための科目としてカリキュラム・ポリシーに則って学修が進められたと考えられる。「人間と社会」の領域においても、到達目標の達成度や自由記述から、概ねCPに則って学修が進められたと考える。

ビジネス・コミュニケーション

「ビジネス実務総論」「オフィス実務」が卒業必修科目として、他8科目が選択科目として開講されている。授業評価アンケート結果や、「将来のための知識を身につけることができた」「社会に出て役に立つ知識を学べた」「高校では学べなかったことを学べた」などの自由記述等から、CPに則って学修が進められたと考える。

メディア・クリエイティブ

情報・デジタル系の科目や司書資格に関する科目群である。「情報科学概論」「情報活用」が卒業必修科目として、司書資格関連科目を含め8科目が選択科目として開講されている。選択科目だが選択科目は資格必修科目であり、受講意欲の高い学生が受講していると考えられる。特にこの科目群では実社会で役に立つ次世代の教養ともいえる教育内容になっていることから、CPに則って学修が進められたと考える。

キャリア・アドバンス

「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」「ライフデザイン論Ⅰ・Ⅱ」「キャリアデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「プロジェクト演習」が卒業必修科目として開講されている。他、選択科目が2科目ある。日本語表現法では、授業評価アンケート結果や、「レポートやスライドの書き方が理解できた」、「レポートを書く力がついた」などの自由記述等から、CPに則って学修が進められたと考える。キャリアデザインやライフデザイン論においては、実務家教員の経験や、外部講師による社会の実情を体現した講義が展開されたことから、専門的な技能の修得や地域社会に貢献できる能力の修得を目指すCPに則って学修が進められたと考える。プロジェクト演習については、「社会で必要とされる専門的な技能を修得できる」という観点から、さまざまなグループワークやプレゼン等により、コミュニケーションスキルや合理的な意思決定プロセスを学んだり、実際に事業所を訪問したりした。授業自体の全体的に高い評価や自由記述の記載内容から、CPに則って学修が進められたと考える。

④科目の配当状況(開講学期)

教養学科の専門科目には、教養学科カリキュラム・ポリシーを踏まえ、教養学科ディプロマ・ポリシーと関連した、以下の科目群がある。この科目群の専門科目に資格に特化した科目を加え教育課程が編成されている。

- a. リベラルアーツ
- b. ビジネス・コミュニケーション
- c. メディア・クリエイティブ
- d. キャリア・アドバンス

令和5年度と令和6年度卒業生の科目配当状況を表2.3に示す。

表2-4 科目配当状況表（令和5年度・令和6年度卒業生）

科目群	1年前期		1年後期		2年前期		2年後期		総計	
卒業年度	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6
a. リベラルアーツ	2	3	7	6	7	7	7	6	23	22
b. ビジネス・コミュニケーション	3	3	2	2	0	0	1	1	6	6
c. メディア・クリエイティブ	4	4	3	2	2	2	2	2	11	10
d. キャリア・アドバンス	2	2	3	3	3	3	2	2	10	10
※資格特化科目	1	1	5	5	6	6	5	5	17	17
総科目数	12	13	20	18	18	18	17	16	67	65

※2年後期語学選択は1科目として算定

教育課程の変更により開講科目数が2科目減少しているものの、令和5年度と令和6年度を比較し配当学期のバランスに大きな変更は見られない。全体の科目数および配当学期については1年前期に基礎的な科目、1年後期以降に分野に特化した科目や資格取得に関わる科目を配当するというように、就職活動や卒業後のキャリアに行かせるようバランスよく配当している。

⑤総合評価

試験とその結果としての成績評価・GPA、修得単位数、分野別科目（リベラルアーツ、ビジネス・コミュニケーション、メディア・クリエイティブ、キャリア・アドバンス）、科目の配当状況について検証をおこなった。成績評価・GPAの観点からは、成績不審者が数名あるが、指導教員による指導を適切に行っており、学科として適切に学修が進められたと考える。修得単位数という観点では、令和5年度と比較し全体として総修得単位数の減少がみられたが、多くの学生が最低修得単位数を超える単位を修得しており、学科として適切に学修が進められたと考える。分野別科目の各領域においても、授業評価アンケート結果や授業評価アンケートの自由記述等から、CPに則った学修が進められていると評価できる。科目の配当状況という点でも、令和5年度から大きな変更はなく、学びの順序、就職活動や卒業後のキャリアに行かせるようバランスよく配当しており、学科として適切に学習が進められたと考える。

（3）ディプロマ・ポリシーに基づく検証

①専門的知識や技能

GPA

令和5年度と令和6年度の教養学科卒業生のGPAを、数値に分けて整理したものを表3.1と表3.2に示す。なお、卒業延期者は含まない。

全体では、1年次と2年次を比較し、各割合の推移に差は見られない。したがって、令和6年度卒業生は2年間のGPAに大きな変動がなかったといえる。通算では49名（58.3%）が3.0以上、2.5以上3.0未満は22名（26.1%）であり、8割以上が通算2.5以上となっている。以上の結果から、高い専門的知識や技能を身につけた学生を育成できたと判断する。

しかしながら、新たに設けた成績不振に該当する通算2.0未満となった学生も令和4年度同様に6名ほどいる。そのような学生について、在学中に必要な支援を行っていく必要がある。

表 3-1 1 年次 G P A

G P A (1 年次)	3.0 以上		3.0 未満 2.0 以上		2.0 未満	
	R 5	R 6	R 5	R 6	R 5	R 6
人数	40 名	46 名	38 名	22 名	6 名	2 名
割合	47.6%	65.7%	45.2%	31.4%	7.1%	2.85%

表 3-2 2 年次 G P A

G P A (2 年次)	3.0 以上		3.0 未満 2.0 以上		2.0 未満	
	R 5	R 6	R 5	R 6	R 5	R 6
人数	53 名	48 名	27 名	20 名	4 名	2 名
割合	63.0%	68.5%	32.1%	28.5%	4.7%	2.85%

資格取得状況

令和 5～6 年度の教養学科卒業生の資格の取得状況は表 3-3 のようになっている。

表 3-3 資格取得状況

免許・資格	令和 5 年度			令和 6 年度		
	卒業 生数	取得 者数	取得 割合	卒業 生数	取得 者数	取得 割合
ビジネス実務士	84 名	20 名	23.8%	70 名	17 名	24.3%
上級ビジネス実務士		26 名	31.0%		18 名	25.7%
上級ビジネス実務士 (サービス実務)		38 名	45.2%		26 名	37.1%
秘書士		22 名	26.2%		14 名	20.0%
上級秘書士		22 名	26.2%		22 名	31.4%
上級秘書士(メディカル秘書)		32 名	38.1%		9 名	12.9%
情報処理士		35 名	41.7%		36 名	51.4%
ウェブデザイン実務士		23 名	27.4%		23 名	32.9%
司書資格		18 名	21.4%		10 名	14.3%

多くの学生が卒業最低単位数を超える単位を修得し、資格を取得している。現代社会に求められる知識及び技能を活用する実践力と、情報を収集・分析・発信する情報活用能力について、短大での学びを通して身につけ社会的に認定されたと判断する。

なお、他学科との共通資格である、日本茶アドバイザー資格、ピアヘルパー資格、認定絵本士資格があるが、学科の DP の検証ということで、これらの資格は検証対象としない。

②コミュニケーション能力

学生の実成長に関する所見

本学科では本学科 DP②コミュニケーション能力に強く関連する科目として、卒業必修科目としては、キャリア・アドバンス科目に「日本語表現法 I」「日本語表現法 II」「ライフデザイン論 I」「ライフデザイン論 II」を開講し、選択科目としては、分野別選択必修であるリベラルアーツ科目 (a) 心理) に 6 科目「人間関係とコミュニケーション」「生涯発達心理学」「臨床心理学」「カウンセリング入門」「臨床人間学」「社会心理学」、(b) 人間と社会) に「生涯学習概論」を開講している。

卒業必修科目について検証すると、日本語表現法 I・II の成績分布は表 3.4、表 3.5 のとおりである。

表 3-4 「日本語表現法Ⅰ」の成績分布

	秀	優	良	可	平均点
令和 5 年度	19 人 (24.4%)	39 人 (50.0%)	14 人 (17.9%)	5 人 (6.4%)	82.75 (100%)
令和 6 年度	4 人 (6.6%)	40 人 (65.6%)	14 人 (23.0%)	3 人 (4.9%)	81.9 (100%)

表 3-5 「日本語表現法Ⅱ」の成績分布

	秀	優	良	可	平均点
令和 5 年度	26 人 (35.6%)	38 人 (52.1%)	5 人 (6.9%)	4 人 (5.5%)	86.64 (100%)
令和 6 年度	4 人 (6.9%)	38 人 (65.5%)	12 人 (20.7%)	3 人 (5.1%)	81.17 (100%)

日本語表現法Ⅰでは5年度と6年度を比較して大きく変化はない。提出課題が多かったため、未提出による減点が多く見られた。提出物の解答状況から理解に不安がある学生がいる一方で、振り返りを通して改善が見られるものも多く、反復することで定着する見込みがあることが実感できた。日本語表現法Ⅱでも振り返りを通して改善が見られる者もあり、反復することで定着する見込みがあることが実感できた。一方、学生の評価では、学生によって習熟度の差はあるが、学生からはプレゼンテーションやグループ活動に対する高い評価のコメントが多く寄せられている。これらから、DP②コミュニケーション能力を身につけた学生が育成されていると考える。

リベラルアーツ科目 (a) 心理) では6科目中1科目以上の選択必修であり、それらの授業アンケートでも学習目的を達成できたような記述も多く見られている。「生涯発達心理学」では「これからの自分の人生であったり、親や祖母と関わり方であったり、この授業で知れたことで役立てられることが沢山あると思った」、「人間関係とコミュニケーション」で「人間関係とコミュニケーションについて学び自分の性格や人との関わりについて向き合うことができた。」「コミュニケーションという分野で人との関わり方を改めて考え直すことが出来た」「生活していて他者との関わりの中で、どういう行動をすればいいのかや他者と自分、社会との関わりの中での、気持ちの移り変わりについて学ぶことができた。」などの回答が得られている。特に「人間関係とコミュニケーション」は6種の資格の必修科目となっており在学1年生58名中52名が受講し失格1名以外は全員単位修得できている。更には「生涯発達心理学」と「カウンセリング入門」の単位修得で受験資格が得られる「ピアヘルパー」認定試験には1年次に7名が受験し6名が合格している。これらのことから教養学科 DP ②コミュニケーション能力（他者に共感し、コミュニケーションスキルを活かして行動する能力を身につけている。）を身につけた学生が育成されたと判断できる。

就職・進路状況

経団連による「2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果」によれば、企業が「選考時に重視する要素」に関して、コミュニケーション能力は16年連続で1位であり「主体性」が第2位（10年連続）であった。一方コロナ禍の経た「2021年度入社対象 新卒採用活動に関するアンケート結果」では就活内容が変化しウェブ面接も多く取り入れられたことが報告されていた。そのような就職環境の中、令和5年度教養学科卒業生の就職率は97.4%、6年度卒業生の就職率は98.5%となり、一部の正規雇用を望まない学生以外は社会人あるいは四年制大学編入生として巣立っている。教養学科では、就職活動に備えて、初年度の導入教育として「ビジネス実務総論」さらに社会人としての基礎的なスキル、就活の進め方を「キャリアデザイン

ンⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を中心に、グループまたリモート環境も含めたコミュニケーション能力を向上させる教育に力を入れている。また就職に向けて社会を知るためにボランティアやインターンに参加するようキャリア教育で促している。これらの結果が上記の就職率の高さとして表れ、コミュニケーション能力および主体性を身につけた学生を育成することができたと判断する。

③グローバル社会への理解

学生¹の成長に関する所見

教養学科では令和4年度入学生教育課程(令和5年度卒業生対象)において専門科目表の編成を大幅変更した。国際理解・異文化理解を促進する科目は、令和4年度は2年次の分野別専門科目(国際理解)9科目は、令和5年度にはリベラルアーツ「d 国際理解」4科目、ビジネス・コミュニケーション5科目に再編されている。その中の2年前期必修科目「言語・文化の多様性」では、語学担当教員の知見・体験をもとに外国の文化や社会状況を学習している。学生は同講義を通じて外国語のみならず文化間の比較から異文化理解を深めることができたといえる。

また、「言語・文化の多様性」により生じた異文化への興味に対し、2年次後期開講の選択必修科目「外国語(英語・英会話・ヨーロッパ言語・中国語・韓国語)」において各自の興味に応じた外国語における実社会でのコミュニケーションを想定した講義内容により外国語能力が高められたといえる。

さらに、リベラルアーツ「b 人間と社会」の「哲学」「文化人類学」や、「d 国際理解」の「グローバル・コミュニケーション」「異文化間コミュニケーション論」等においても外国文化のみならず移民問題や国際紛争などの時事問題を含んだ国際情勢を学習することにより、全体として異文化理解力を成長させることができたと考えられる。これらの点から本学科ではグローバル社会が内包する問題への理解を深めた学生を育成することができたと判断する。

成績評価

2年前期必修科目「言語・文化の多様性」の成績分布については、令和4年度は89名の履修者中90点以上8名、80点～89点26名、70点～79点31名、60点～69点24名で全員が合格点に達し、平均点は75.8点であった。

令和4年度の反省を踏まえ令和5年度は講義内でレポート作成における注意点などの指導を行った結果、令和5年度は85名の履修者中90点以上24名、80点～89点41名、70点～79点14名、60点～69点6名で全員が合格点に達し、平均点は84.1点と昨年度以上に学習成果が向上する結果となった。

令和6年度は72名の履修者中90点以上18名、80点～89点28名、70点～79点16名、60点～69点10名で全員が合格点に達し、平均点は81.6点であった。令和5年度と比較し、平均点が下がったのは学生の学習態度等の問題ではなく、天候不良による交通機関の途絶や就職活動の早期化等の影響があったものと推察する。このような点から、成績評価の観点からも、DP③への理解を深めた学生を育成することができたと判断する。

表 3-6 「言語・文化の多様性」の成績分布

	秀	優	良	可	平均点
令和5年度	24人 (28.2%)	41人 (48.2%)	14人 (16.5%)	6人 (7.0%)	84.1 (100%)
令和6年度	18人 (25.0%)	28人 (38.9%)	16人 (22.2%)	10人 (13.9%)	81.6 (100%)

④学習の達成度自己評価

まず、学習の達成度自己評価を検証する。2024年度学習の達成度自己評価を表3.7、参考として2023年度学習の達成度自己評価を表3.8に示す。

表 3-7 学習の達成度自己評価（2024 年度）

			科目数	①	②	③	④	⑤
1 年生	前期	DP_1	11	0.0%	0.4%	8.9%	58.6%	32.1%
		DP_2	2	0.0%	1.1%	9.2%	57.5%	32.2%
		DP_3	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	後期	DP_1	13	0.0%	1.6%	7.6%	58.2%	32.6%
		DP_2	4	0.0%	0.0%	11.6%	63.7%	24.7%
		DP_3	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2 年生	前期	DP_1	9	0.6%	0.6%	8.5%	70.9%	19.4%
		DP_2	2	0.0%	1.4%	5.6%	73.2%	19.7%
		DP_3	6	0.0%	1.6%	8.7%	73.0%	16.7%
	後期	DP_1	10	0.0%	0.0%	8.4%	64.2%	27.4%
		DP_2	3	0.0%	0.0%	5.2%	72.4%	22.4%
		DP_3	5	0.0%	3.2%	0.0%	80.6%	16.1%

表 3-8 学習の達成度自己評価（2023 年度）

			科目数	①	②	③	④	⑤
1 年生	前期	DP_1	11	0.4%	1.8%	10.7%	72.7%	14.5%
		DP_2	2	0.0%	1.1%	10.2%	72.7%	15.9%
		DP_3	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	後期	DP_1	13	0.5%	2.4%	10.0%	68.3%	18.7%
		DP_2	4	0.0%	2.1%	11.1%	70.4%	16.4%
		DP_3	1	0.0%	7.5%	15.0%	60.0%	17.5%
2 年生	前期	DP_1	17	0.0%	1.2%	11.2%	56.4%	31.3%
		DP_2	3	0.0%	0.0%	8.0%	60.9%	31.0%
		DP_3	6	0.5%	1.1%	11.6%	54.7%	32.1%
	後期	DP_1	14	1.1%	2.5%	14.0%	49.1%	33.3%
		DP_2	5	0.0%	0.7%	9.0%	56.7%	33.6%
		DP_3	7	0.7%	3.5%	15.3%	50.7%	29.9%

表内の①～⑤はそれぞれ、①：ほとんど達成できなかった、②：あまり達成できなかった、③最低限達成できた、④おおむね達成できた、⑤十分達成できた、を表す。

2023 年度、2024 年度とも 1 年生よりも 2 年生のほうが、いずれの到達目標においても達成度の自己評価が高い傾向がある。2023 年度の入学生は、達成度の自己評価について、「おおむね達成できた」、「十分達成できた」の割合の合計が、いずれの到達目標についても 1 年次（2023 年度）は 8 割程度だったが、2 年次（2024 年度）は、DP_1 が 91.6%、DP_2 が 94.8%、DP_3 が 96.7%となっている。卒業時の達成度の自己評価が高いという点からも概ね DP に謳っている方針を達成した学生を育成できていると考える。

⑤総合評価

教養学科 DP の「専門的知識や技能」、「コミュニケーション能力」「地域・グローバル社会への理解」を身につけた学生を育成できているかを検証した。

まず、GPA や資格取得状況から、「高い専門的知識や技能」を身につけた学生を育成できたと判断できる。

ただし、新たに設けた成績不振に該当する通算 2.0 未満となった学生がいるので、そのような学生について、在学中に必要な支援を行っていくことは課題である。

「コミュニケーション能力」については、授業評価アンケートの自由記述に見られる、学生の成長に関する所見や、コミュニケーション能力を要求する状況下で高い就職率を達成していることから、コミュニケーション能力を身につけた学生が育成されたと判断できる。

「グローバル社会への理解」については、授業内容及び成績評価状況から、グローバル社会が内包する問題への理解を深めた学生を育成することができたと判断する。

さらに、「学習の達成度自己評価」において、卒業時の達成度の自己評価が高いという点からも、DP に謳っている能力等を身につけた学生を育成することができていると考える。

また、学習成果を達成するために、「教養学科のディプロマ・ポリシー」及び「教養学科のカリキュラム・ポリシー」に従って教育課程を編成し、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与している。

6. あとがき

今回の第3号アセスメント報告書は、令和 5・6 年度の実績に基づいて、令和 7 年度8月に「令和 6 年度アセスメント報告書」として作成された。

今回の3つのポリシーの検証と PDCA サイクルの実施を通じて、教育の質向上に向けた取り組みの重要性を再認識できた。また、今回の検証の過程で明らかになった課題や改善点については、対応策を検討し、実効性のある改善を進めていき、学生の資質・能力の育成に寄与できるよう努めていきたい。